



みなとくれきしかんこう

港区歴史観光 ガイドブック

Minato City
Historical Sightseeing Guidebook

先端都市に佇む、
歴史と伝統の息づかい



港区で人々が活動を始めてから、およそ3万年の時間が流れました。この間、港区内では様々な人々が暮らし、あるいは活動を続けてきました。これらの痕跡は現在、都市化が著しく進んだまち中に、歴史的遺産—史跡・旧跡等—として遺され、受け継がれています。

本書は、多様な港区の歴史から、「古代史」「庭園史」「事件史」「外交史」「近代史—産業・交通・通信・医療・教育・行政」の5分野に焦点を当て、今でも目にし、触れることのできる歴史的遺産をたどる折の灯浮標としていただくために作成されたものです。

本書を携え、港区内に点在する時の交差点をめぐりながら、先人の活躍や思惟に触れる豊かなひとときをお持ちいただくことができたなら、制作者としてこの上ない喜びです。

目次	都会にひそむ古代のロマン	1
	名園でたどる時代の旅	9
	港区事件簿を追って	15
	元禄赤穂事件の故地をゆく	15
	幕末・維新事件簿	25
	時代の夜明けをたどる旅	31
	幕末外交史跡をゆく	31
	近代史跡	41
	文人が愛したまちをたどる旅	53

例言

1. 本書は、港区が推進している観光振興事業の一環として、区内に遺る歴史的遺産—史跡・旧跡—を、楽しく学びながら観光していただくために作成されたガイドブックです。
2. 本書は、平成23年度発行「港区歴史観光ガイドブック」に基づき、一部掲載情報を更新し、港区産業・地域振興支援部が改訂発行したものです。
3. 本書で使用している写真のうち、資料（浮世絵・出土遺物）及び迎賓館赤坂離宮・慶應義塾大学（図書館・演説館）の写真は港区教育委員会事務局教育推進部図書文化財課文化財係（港区立郷土歴史館）の提供によるものです。
4. 本書に関わる著作権は港区が保有します。
5. 各施設等の開館日時は社会情勢等により変更になる場合がございます。

凡例

1. 年号は、和暦（西暦）とし、太陰暦を用いました。太陽暦は併記していません。
2. 改元の年は、改元の月日に従い記述しました。例えば、1865年は4月6日までが元治2年ですが、4月7日以降は慶応元年としてあります。
3. 史跡等の名称は、原則として「港区文化財のしおり」（港区教育委員会）によっていますが、本書の利用をより容易にするため、編集機関が付したものがあります。
4. 文末の□□の表示は、文化財の指定等の状態を示しています。
国指：国指定文化財 都指：東京都指定文化財 区指：港区指定文化財
区登：港区文化財総合目録に登録された区指定文化財以外の文化財



港区に本格的な稲作農耕文化が伝わったのは、今からおよそ2千年前、弥生時代中期のことです。その後、国家が形成され、公家政権が国を動かし、やがて武家政権に変わっていく頃まで、時代名称でいえば、弥生時代から平安時代の終わりまでを、ここでは古代としておきましょう。

弥生時代の人々は初め、どちらかと言えば海岸寄りの高台に集落を営みました。三田台の辺りです（→7ページ）。時代が下るにつれ、彼らが活動する場所は内陸へ入り込んでいきます。麻布台や赤坂台では、卑弥呼が活躍した3世紀の遺跡が10ヵ所程発見されています。もちろん、三田台や高輪台といった海岸寄りの高台にも集落は形成され続けます。

次いで古墳時代には、4世紀の終わり、もしくは5世紀の初めの頃、現在の芝公園に南武蔵で最大級の前方後円墳といわれている芝丸山古墳が築造されます（→4ページ）。港区には20基の古墳が存在したとされていますが、形状その他がある程度明瞭な、現在でも築造当時の姿を髣髴とさせる古墳は、芝丸山古墳において他にありません。その芝丸山古墳の周辺にはかつて、10基余の円墳が点在していました。これらの古墳は、いずれも江戸時代以降の土木工事等によって消え失せてしまいました。

ところで、三田台から高輪台にかけて、

古代の官道が通じていたとする説があります。このことを裏付けるかのように、聖坂上から二本榎通り沿いにかけて、弥生時代から平安時代の遺跡が点々と発見されています。この付近を通って、父親の赴任先であった上総国（現千葉県）から、父親と共に帰京したといわれている一人の女性がいました。『更級日記』の作者菅原孝標女すがわらたかすえのみすめです。時は11世紀前半、平将門の乱からおよそ1世紀、藤原北家が強大な勢力をもち貴族政治が発達する中、国風文化の創造が始まった時代でした。『更級日記』は作者の回想録ですが、ここに記された竹芝寺の故地を、今の亀塚（→7ページ）・済海寺（→39ページ）付近と見る向きがありません。

麻布もまた、区内で古くから開かれた土地の一つです。平安時代前半に創建されたとされる善福寺（→8ページ）、平将門との因縁が考えられる麻布氷川神社（→8ページ）など、港区の古代史をつづる上で不可欠な史跡・旧跡が少なくありません。

古代の港区は、未だ謎に富んだ世界です。少し想像をたくましくしながら、古代の史跡・旧跡をめぐってみませんか。新たな発見があるかもしれません。

都会

都会にひそむ
古代のロマン



S = 1:24,000

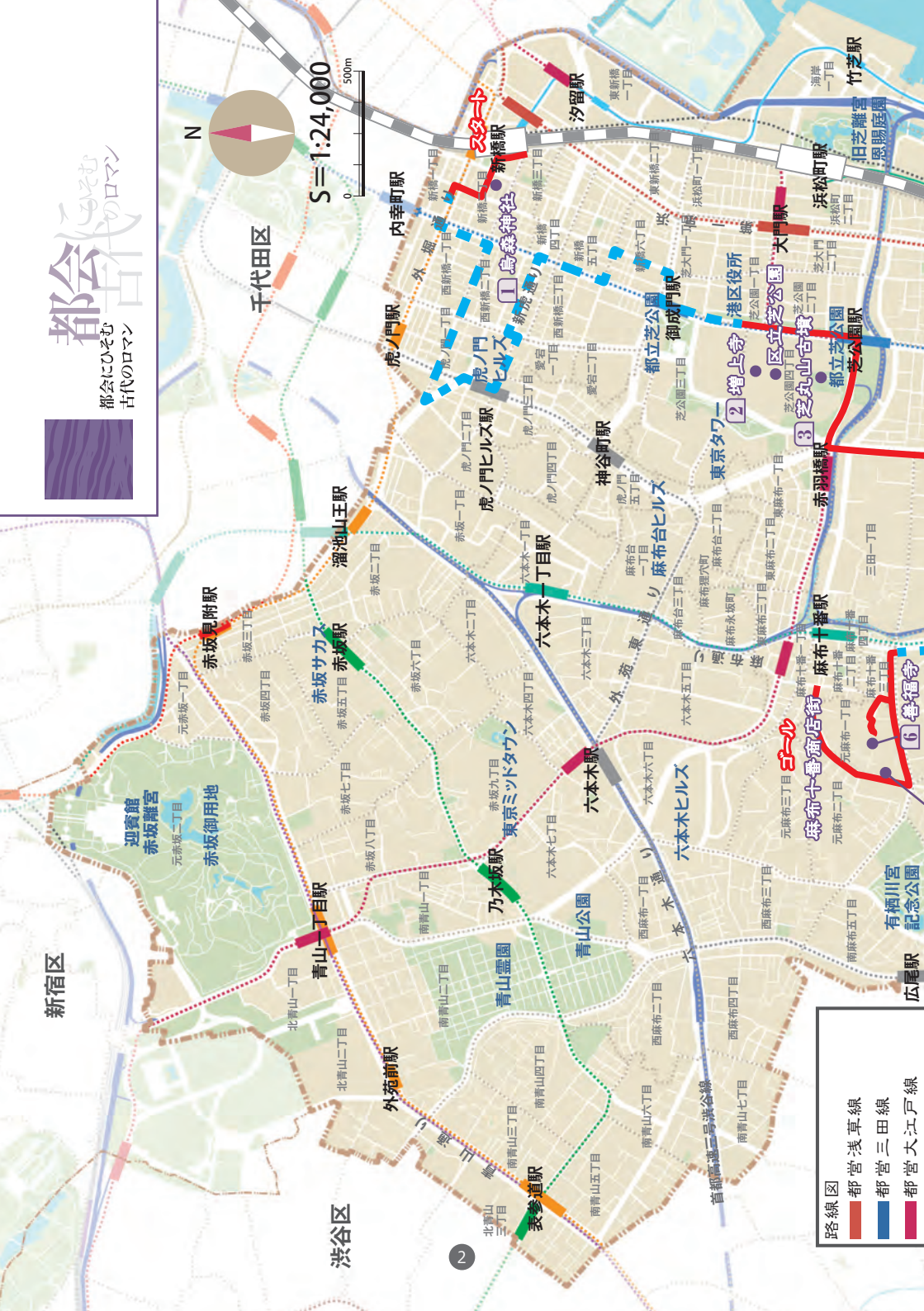


新宿区

千代田区

渋谷区

- 路線図
- 都営浅草線
 - 都営三田線
 - 都営大江戸線



からすもりじんじゃ

烏森神社

所 新橋2-15-5

コース①

神社の伝承によれば創建は天慶3年(940)にさかのぼるそうです。武士同士の争いが続く関東では、天慶2年(939)に平将門が兵を挙げ関東8カ国を制圧します。乱の鎮圧を命じられたのが平貞盛と、むかで退治の伝説で著名な「倭藤太」こと藤原秀郷でした。秀郷がある稲荷社に戦勝祈願したところ、白狐が現れ白矢を与えました。秀郷はその矢をもって将門を討ち取ることができたので、お礼に建立したのが烏森神社だといわれています。これはあくまで伝説ですが、享徳4年(1455)にかまくらくぼろあしかがしげうじ鎌倉公方足利成氏が出した戦勝祈願の文書が残されていますので、遅くとも室町時代にはさかのぼります(文書は非公開です)。また、貞享4年(1687)の地誌『江戸鹿子』によれば、元暦元年(1184)に秀郷の子孫下河辺行平が寄進した鱧口(鉦のような銅製の仏具)があったそうです。



芝丸山古墳

所 芝公園4-8 都立芝公園内

コース③

全長100mをこえる都内最大級の前方後円墳です。標高約16mの台地の端にあり、5世紀ごろの築造と考えられています。江戸時代の増上寺の建立や近代以降の開発によって、かなり原形が損なわれています。明治31年(1898)、東京帝国大学(現東京大学)の坪井正五郎(1863~1913)により発掘調査が行われ、埋葬施設が失われていたことがわかりました。また、以前は周辺に10基の円墳群があり、前方後円墳に関係するものと考えられていましたが、戦後に行われた明治大学の調査によって、両者の築造時期がかなり離れており、円墳群の方が200年ほど新しいことがわかりました(円墳群の方は今はありません)。現在、古墳の裾近くに碑と説明板が建っています。

都指





コラム 増上寺

江戸の寺院の中で最も大きく、格式が高かったのが、上野の寛永寺と芝の増上寺です。この2つの寺院には徳川將軍家の墓所が造営され、増上寺には徳川將軍15代のうち、2代秀忠、6代家宣、7代家継、9代家重、12代家慶、14代家茂の6人が葬られています。

江戸時代以前の増上寺については詳しいことはわかっていませんが、室町時代に真言宗から浄土宗に改宗したようです。また、もとは今の千代田区麹町・紀尾井町のあたりにあり、徳川家康が江戸に入府した時にたまたま門前を通りかかり、住持の源譽存応に会い、これがきっかけで菩提寺となったといわれています。その後、日比谷に移り、慶長3年（1598）に家康の命によりこの地に移りました。

現在の芝公園はほぼ昔の増上寺の境内にあたり、数多くの文化財がありました。東京大空襲でほとんど焼失してしまいましたが、三解脱門（国重要文化財）など

は戦禍をまぬがれ現存します。

令和7年4月「増上寺が所蔵する三種の仏教聖典叢書」（増上寺三大蔵）がユネスコ（国連教育科学文化機関）の「世界の記憶」（世界記憶遺産）に登録されました。

※令和6年秋より、修復工事のため、拝観できないこともあります。工事完了は、令和14年11月頃の予定です。

コース②



広重 東都名所 芝神明増上寺全図

郷土歴史館

所 白金台4-6-2



港区立郷土歴史館は、昭和13年(1938)に竣工した旧公衆衛生院の建物を耐震補強やバリアフリー化を行い、がん在宅緩和ケア支援センター、あびい白金台、白金台学童クラブ、白金台区民協働スペース、白金台駅自転車駐車場との複合施設として、改修工事を行いました。

中央階段や旧講堂、照明器具など、建物のいたるところに、旧公衆衛生院当時の面影が残っています。

郷土歴史館の展示室は、無料ゾーンの港区のあらましを紹介するガイダンスルーム、実物の資料を触ることができるコミュニケーションルームのほか、港区のテーマに沿った展示を行う有料の常設展示室、期間を定めて開催する特別展示室が整備されて



います。

また、ミュージアムショップやカフェを設置しており、誰もが利用することが可能です。

開館時間：9：00～17：00(土曜日のみ20：00まで)
 ※有料展示室の入館受付は閉館の30分前まで。
 休館日：毎月第3木曜日(祝休日の場合は前日) 年末年始(12/29～1/3) 特別整理期間
 料金：常設展は大人300円、小中高生100円、未就学児無料
 区内在住の65歳以上、区内在住、在学の小中高生等無料(証明するもの持参)
 特別展・企画展は、展示ごとに設定
 港区民無料公開日：2/11、5/5、8/11、11/3
 問い合わせ：03-6450-2107



コラム

たかなわかいがん 高輪海岸

現在の第一京浜国道は江戸時代には東海道として知られており、海岸を通る主要道路でした。浮世絵に当時の賑やかな東海道の様子が描かれています。



※画像は港区立郷土歴史館提供

亀塚

所 三田4-16-20 亀塚公園内

コース④

現状で直径約30m、高さ約4mの円形の塚で、古墳の可能性も指摘されていますが断定はできていません。周辺の地域からは古代の住居跡や貝塚が発見されており、公園内からも弥生時代の集落跡が発掘されました(亀塚公園遺跡)。江戸時代に入ると、ここは上野沼田藩土岐家の下屋敷となりました。山頂には寛延3年(1750)に藩主よりおき頼熙が建てた亀山碑が残されています。亀塚とさいかいじ濟海寺のすずむら一帯は、平安時代に菅原孝標のすけ女が記した『更級日記』に登場する竹芝寺の跡地といわれており、亀山碑にもこのことが刻まれています。また、文明年間(1469~87)には江戸城の城主おおたどうかん太田道灌がここにせつこう斥候(見張り)を置いたともいわれています。亀塚の由来や亀山碑については、江戸時代後期の地誌『江戸名所図会』にも記されていますので、この頃には広く知られた存在であったようです。 [都指]



三田台公園

所 三田4-17-28

コース⑤

ここから100mほど南東の地点(三田4-19-15 NTTデータ三田ビル本館)において、昭和53年(1978)7月から約1年半かけて発掘調査が行われました。遺跡からは、江戸時代の犬・猫の墓石・供養塔、古墳・奈良・平安時代のたてあなじゅうきょ竪穴住居跡、弥生時代中期のほうはいしゅうこうぼ方形周溝墓(方形に溝をめぐるせ、内側に盛り土をしてつくられた墓)、縄文時代後期の貝塚と竪穴住居跡が順に重なって発見されました。この遺跡は伊皿子貝塚遺跡と名付けられ、貝層の断面と出土品は郷土歴史館に保存・展示されています(→6ページ)。三田台公園は港区で初めての遺跡公園として、貝層の断面と竪穴住居を復元したレプリカを展示しました。ここでは原始・古代の人々の生活の様子を知ることができます。



ぜんぶくじ
善福寺

所 元麻布1-6-21

コース⑥

寺伝によれば天長元年（824）に空海が開山したとされる港区を代表する古刹です。当初は真言宗の寺院でしたが、鎌倉時代に親鸞が当寺を訪れた際、住持の了海が親鸞に帰依し、浄土真宗に改宗しました。善福寺を中心とした門徒集団を「阿佐布門徒」といい、品川など江戸周辺に布教を進め、南関東における浄土真宗の大きな拠点となります。その後、江戸時代に入り、徳川幕府から高10石の朱印地を与えられ、江戸における一向宗の有力寺院として多くの末寺を抱えました。

都内最古とされるイチョウ（国指定天然記念物）、木造了海坐像（国重要文化財、非公開）、慶長12年（1607）に大坂八尾の東本願寺八尾別院本堂を移築したとされる善福寺本堂（区指定文化財）など貴重な文化財が残されています。



あざぶひかわじんじや
麻布氷川神社

所 元麻布1-4-23

コース⑦

麻布地域の惣鎮守です。天慶年間に源経基が平将門の乱を平定するため関東に下った時に創建したという伝承があります。また、享保17年（1732）に書かれた江戸の地誌『江戸砂子』や天保5・7年（1834・36）に出版された地誌『江戸名所図会』などによれば、文明年間（1469～87）に江戸城の城主太田道灌が勧請したという説も紹介されています。また、創建当初は2,000坪の広大な境内地を持っていたそうですが、増上寺の所領となったため、寛文2年（1662）にこの地に遷ってきたといわれています。

麻布氷川神社、善福寺のある元麻布から南麻布にかけて、多くの古代の遺跡が発見されています。





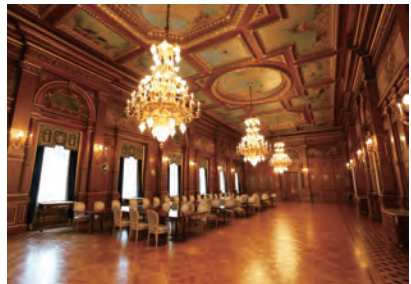
名園でたどる
時代の旅

名園でたどる 時代の旅

港区には名園と呼ばれる庭園があります。これらの来歴には大きく2つの流れがあります。1つは江戸時代の大名庭園の系譜を引くものです。江戸時代、現在の港区域には大名屋敷がとて多くありました。江戸城に近い場所には上屋敷（大名の当主が住み、かつ藩の江戸における出張所の役割を果たした屋敷）が立ち並び、広大な敷地に庭園を築造する大名もいました。現在も残る旧芝離宮恩賜庭園（→12ページ）はそうした大名庭園の系譜を引く庭園です。ここでは江戸時代の前期に小田原藩の藩主大久保家の上屋敷がおかれ、大久保氏はここに「楽壽園」という庭園を造りました。当時のこの近辺は埋め立てられた臨海地域で、池に海水を引き込み、潮の満ち引きで景観を変えるなど、趣向を凝らした庭園でした。また、現在の檜町公園（→13ページ）には江戸時代、長州藩毛利家の下屋敷があり、ここには「清水園」という有名な大名庭園がありました。現在、庭園そのものは残っていませんが、雰囲気を楽しむことができます。

もう1つの流れは近代に造られた庭園です。港区には旧芝離宮、旧朝香宮邸（→14ページ、現東京都庭園美術館）、旧有栖川宮邸（→14ページ、現有栖川宮記念公園）、そして赤坂離宮と、離宮や宮家の本邸が少なくありません。

このほか、近代の代表的な財閥である岩崎家（三菱財閥）の本邸に造られた庭園があります（→13ページ）。この庭園は当時の第一級の造園家である「植治」こと7代目小川治兵衛^{うえじ}によって造られた代表的な近代日本庭園です。現在、国際文化会館の庭となっていますが、当時の姿とほぼ変わりありません。また、芝公園内に造られた溪流（→12ページ）は近代公園行政の先駆者である長岡安平^{ながおかやすへい}の設計によるものです。都会の中に浮かぶ静寂の空間でゆっくり過ごしてみるのもよいかもしれません。



迎賓館赤坂離宮

休館日：毎週水曜日又は接遇等による非公開日。
 参観コースによっては、事前予約が必要となります。
 詳しくはHP (<https://www.geihinkan.go.jp/akasaka/>)
 かテレフォンサービス (03-5728-7788) にてご確認ください。

名園でどる 時代の旅

名園でたどる
時代の旅



S = 1:24,000

新宿区

千代田区

渋谷区

10

- 路線図
- 都営浅草線
 - 都営三田線
 - 都営大江戸線



3 旧毛利家庭園「芝公園」跡 (新町公園) 二丁目

4 回岩崎邸庭園 (国際文化会館)

2 芝公園紅毛屋敷跡・汐立 港区役所

都営浅草線

都営三田線

都営大江戸線

都営浅草線

都営三田線

都営大江戸線

旧芝離宮恩賜庭園

所 海岸 1-4

コース①

本庭園は相模小田原藩主大久保忠朝が屋敷内に造った大名庭園を起源とします。このあたりは明暦年間（1655～58）に埋め立てられ、延宝6年（1678）に忠朝が拝領しました。忠朝は、貞享3年（1686）に回遊式庭園を造り「楽壽園」と名付けました。海沿いの立地をいかし、池に海水を引き入れて潮の満ち引きで景観が変わるようにしました。また、名石を配し、中国の西湖のジオラマを造るなど様々な趣向を凝らしました。

その後、堀田家、清水家、紀伊徳川家を経て、明治4年（1871）に有栖川宮熾仁親王邸となり、同8年（1875）に宮内省が買上げ、翌9年（1876）に離宮となります。大正13年（1924）に皇太子裕仁親王（後の昭和天皇）の結婚を記念して東京市に下賜され、4月20日に旧芝離宮恩賜庭園として開園しました。

国指定

開園時間：9:00～17:00（入園は16:30まで）
休園日：12月29日～1月1日
料金：一般150円、65歳以上70円
問い合わせ：03-3434-4029



芝公園紅葉瀑布・溪流

所 芝公園 4-3

都立芝公園内もみじ谷

コース②

長岡安平（1842～1925）が明治38年（1905）に設計・築造した庭園です。安平は明治から大正時代にかけての造園家であり、東京府・市の職員として近代日本の公園の発展に力を尽くした人物です。天保13年（1842）肥前大村藩士の子に生まれた安平は、明治3年（1870）に郷土の先輩である楠本正隆にしたがって上京し、新潟に赴任した後、同8年（1875）に東京府知事に就任した楠本から府の土木掛を命じられ、東京府立公園や街路並木などを扱いはじめました。その後、公園管理が移管された東京市の嘱託職員となり公園デザインや公園行政に携わり続けました。浅草公園内の溪流の設計、飛鳥山公園・向島百花園の改修など、安平が手がけた公園・庭園は40以上を数えます。都立芝公園内の溪流は昭和59年（1984）に造園当初に限りなく近い状態に再現されました。



旧毛利家庭園「清水園」跡 (檜町公園)

所 赤坂9-7

コース3

ここには江戸時代、長州藩毛利家の下屋敷（別称「檜屋敷」）がありました。通常、大名の当主は上屋敷に住み、下屋敷は物資の保管や別邸として使用されますが、この屋敷には一時期藩主と世継ぎが住むなど長州藩の中心的な藩邸として利用されました。邸内には名園として広く知られる「清水園」という庭園がありました。邸内に祀られる稲荷社に町人が参詣したり、他藩の藩士が庭を見物したりと、限定的ではありませんが、外部にも解放していたようです。

明治期に入ると第1師団歩兵第1連隊の駐屯地となり、戦後、敷地の大部分に防衛庁が置られました。残りの部分を公園として整備したのが檜町公園です。平成12年（2000）に防衛庁（現防衛省）が市ヶ谷に移転し、跡地が東京ミッドタウンとして開発された折、当公園も再整備され景観が大きく変わりました。



旧岩崎邸庭園 (国際文化会館)

所 六本木5-11-16

コース4

昭和4年（1929）、三菱財閥の4代目当主岩崎小彌太（1879～1945）が岩崎家鳥居坂本邸に造った庭園です。京都の造園家「植治」こと7代目小川治兵衛（1860～1933）の作によるものです。7代目小川治兵衛は近代日本庭園の先駆者とされる造園家で、平安神宮、円山公園、無鄰庵（山縣有朋別邸）、清風荘（西園寺公望別邸）、古河庭園などを手がけ、また住友家や三井家・岩崎家などの財閥の求めに応じて数々の名園を造りました。このほか、京都御苑、修学院離宮、桂離宮、二条城、南禅寺、妙心寺、青蓮院、仁和寺などの修景も手がけています。本庭園は、崖に面した南側と鳥居坂に面した東側に草木を植え、その内側に池を設けた地泉回遊式の日本庭園です。作庭当時の姿がおおむね残されています。

区指



きゅうありすがわのみやてい
旧有栖川宮邸
(有栖川宮記念公園)
 所 南麻布5-7-29 コース⑤

もともとここには江戸時代、陸奥盛岡藩南部家の下屋敷がありました。明治29年(1896)にありすがわのみやたげひとしんのう有栖川宮威仁親王の邸宅となり、威仁親王の母森則子の住居などが設けられました。敷地の広さは20,000坪をこえ、敷地内は起伏に富み、東側の高台から西南側に向けて大きく傾斜しています。大正2年(1913)に威仁親王が死去し、有栖川宮が絶えた後は、同宮の祭祀を引き継いだたかまつのみや高松宮に継承されました。昭和9年(1934)1月15日に高松宮から東京市に下賜され、有栖川宮記念公園として一般開放されました。園内にはかつて三宅坂の旧参謀本部庁舎正門前にあった有栖川宮熾仁親王銅像(明治36年建立)などがあり、また都立図書館が併設されています。



きゅうあさかのみやてい
旧朝香宮邸
(東京都庭園美術館)
 所 白金台5-21-9 コース⑥

昭和8年(1933)、朝香宮鳩彦王(1887~1981)の本邸として造営され、日本の代表的なアール・デコ建築とされます。朝香宮家は明治39年(1906)に久邇あさかのみややすひこおう宮朝彦親王の8番目の王子であった鳩彦王によって創設された宮家です。朝香宮はフランスに滞在中、フランス文化、とりわけ当時流行していたアール・デコ様式に強い関心と理解を示しました。これにより本邸にはアール・デコ様式を望み、設計の一部をフランスのデザイナー、アンリ・ラパンに依頼し、内部装飾もフランスをはじめとする外国から輸入したものを多用しました。戦後、外務大臣・首相公邸、国の迎賓館などとして使われましたが、昭和58年(1983)に美術館として開館しました。園種





元禄15年（1702）12月15日未明、赤穂藩の旧臣47人が本所松坂町の吉良邸を襲撃し、前当主上野介義央こうすけのすけよしひさの首級を挙げました。世にいう「赤穂義士の討ち入り」です。港区には元禄赤穂事件に関わる史跡が数多く残されています。

事件の発端は、元禄14年（1701）3月14日の年賀返礼の儀式直前、勅使饗応役ちよくしきようおうやくを務める赤穂藩主浅野内匠頭長矩あさのたくみのかみながのりが江戸城まつのおおしろ下にて指南役しなんやくを務める高家の吉良上野介義央に切りかかったことに始まります。上野介は応戦せず、内匠頭は旗本梶川與惣兵衛そべえに取り押さえられました。重要な儀式直前に刃傷事件を起こしたことに激怒した將軍徳川綱吉とくがわつなよしは即日、内匠頭に切腹と改易かいえきを命じ、内匠頭は陸奥一関藩田村家上屋敷（→20ページ）に送られ、その日のうちに切腹し、家臣の手によって泉岳寺せんがくじ（→23ページ）に葬られました。翌15日には内匠頭の正室（夫人）阿久里あぐり（瑤泉院）ようせんいんが実家の三次藩邸みやしほん（→21ページ）に移り、鉄砲洲の上屋敷や赤坂南部坂の下屋敷も明け渡しました。国許には3月20日に伝わり、藩内では家老大石内蔵助おおいしくらのすけを中心よしたかに議論が交わされましたが、結局、開城を決め、4月19日に赤穂城を引き渡しました。

野に下った赤穂藩の旧臣は浅野家再興の運動を進めますが、その望みが絶たれたため、急進派の案をいれ吉良邸への討ち入りを決定します。そして内匠頭の月命日にあたる翌15年（1702）12月14日（実際には15日未明）に討ち入り、上野介の首を挙げます。事を終えた大石らは泉岳寺の内匠頭の墓前に報告した後、大目付仙石伯耆守邸おおもつけせんごくほうぎのかみへ出頭します（→20ページ）。大石らは熊本藩細川家・松山藩松平家・岡崎藩水野家・長府藩毛利家にそれぞれ預けられ、翌16年（1703）2月4日に切腹しました（→21～23ページ）。

事件が起きた元禄時代は、5代將軍綱吉の治世下で武断政治から文治政治への転換がはかられ、將軍や幕府の権力が盤石になった時代です。また、経済の発展に伴い庶民の生活が向上し、様々な文化が開いた時代でもありました。このような太平の世になりつつある時代に、数十人が徒党を組んで旗本高家の邸宅を武力で制圧し、前当主を殺害したこの事件は幕府に大きな衝撃を与えました。そして幕府以上にこの事件を大きく扱ったのが庶民でした。人形浄瑠璃にんぎょうじょうや歌舞伎の題材に取り上げられ、様々な物語をつむぎながら、史実の「元禄赤穂事件」とは異なる『忠臣蔵』物語として現代まで受け継がれています。

港区事件簿

港区事件簿を追って

元禄赤穂事件の故地をゆく



S=1:24,000

新宿区

千代田区

渋谷区

- 路線図
- 都営浅草線
 - 都営三田線
 - 都営大江戸線



元禄赤穂事件の故地をゆく



コラム 『忠臣蔵』の世界と港区

「赤穂義士の討ち入り」といいますと、多くの方は『忠臣蔵』を思い浮かべるのではないのでしょうか。しかし、厳密にはこの2つはイコールではありません。もちろん、浅野内匠頭が江戸城松之廊下で吉良上野介に切りかかり、幕府から切腹と改易を言い渡されたこと、また大石内蔵助ら浅野家の旧臣47人が吉良邸に討ち入り、上野介の首を挙げたことはまぎれもない事実です。ただし、私たちが『忠臣蔵』でよく知るお軽・勘平の物語などは完全な創作ですし、内匠頭が上野介に切りかかった理由についても、賄賂説、乱心説などがまことしやかに流布していますが、実ははっきりとした理由はわかっていないのです。このように「元禄赤穂事件」で思い浮かべる名場面の多くは、『忠臣蔵』という物語によっ

て創り出されたものなのです。

赤穂義士の切腹後間もない元禄16年（1703）2月16日、中村座でこの事件を曾我物語になぞらえた『曙曾我夜討』が上演されますがすぐに幕府によって禁止されます。3年後の宝永3年（1706）には上方で近松門左衛門の作による人形浄瑠璃『基盤太平記』が上演され、塩冶判官（浅野内匠頭）、大星由良之助（大石内蔵助）、大星力弥（大石主税）といった配役の原型が作られます。その後、『鬼鹿毛無佐志鑑』、『忠臣金短冊』などの作品が生まれ、吉良邸討ち入りから46年目の寛延元年（1748）にこれらの作品を集大成する形で、竹田出雲らの合作による人形浄瑠璃『仮名手本忠臣蔵』が完成し、大坂竹本座で上演されます。これが大好評となり歌舞伎に取り上げら



芳幾 仮名手本忠臣蔵



豊国 高輪 由良之助
『東海道日本橋品川間』

れ、江戸でも森田座、市村座、中村座の江戸三座で競演されることになりました。以後、『忠臣蔵』といえば『仮名手本忠臣蔵』をさし、様々な演技・演出が加えられ、また錦絵や子ども向けに作られたおもちゃ絵（例えば、芳幾「仮名手本忠臣蔵」）などの題材となります。

赤穂義士が終焉を迎える港区には『忠臣蔵』物語を語る上で重要な場所があります。赤穂義士が本懐を遂げ、主君が眠る泉岳寺へと報告に赴くところは物語のラストシーンを飾る重要な場面です（ただし、歌舞伎では上演されない場面です）。彼らは本所松坂町の吉良邸を出た後、深川を南下して永代橋を渡り、八丁堀、築地、芝、高輪を経て泉岳寺に到着します。一勇斎国芳が描いた「忠臣蔵 義士高輪引取之図」や、三代歌川豊国の



豊国 東都高輪泉岳寺開帳群集之図

『東海道日本橋品川間』^{とうかいどうにほんぼししながわかん}「高輪由良之助」^{たかなわ ゆらの}も義士引き上げの場面を描いた作品です。また、歌川広重の『忠臣蔵 焼香場』^{うたがわひろしげ}は泉岳寺で内匠頭の墓前に向かう義士の姿を描いています。いずれも衣裳はきらびやかに描かれ、歌舞伎の影響を強く受けていることがみてとれます。あるいは、「東都高輪泉岳寺開帳群集之図」^{とうとたかなわせんがくじかい}（三代歌川豊国）は、『仮名手本忠臣蔵』の登場人物たちが開帳で賑う泉岳寺に参詣に訪れるという趣向で描かれ、このように名所と『忠臣蔵』をリンクさせる作品も登場します。

江戸時代の中ごろに誕生した『忠臣蔵』物語は、明治、大正、昭和、そして現代にいたるまで小説や映画、舞台やドラマなどで繰り返し再生産されています。時代の世相や社会観、人生観が反映された日本人の心性に根ざした物語であるといえましょう。



広重 焼香場
『忠臣蔵』

元禄赤穂事件の故地をゆく

あさのたくみのかみ

浅野内匠頭切腹の地跡

所 新橋4-31付近

コース①

元禄14年(1701)3月14日、江戸城まつ松の大廊下のおおろうかで吉良上野介きらくずけのすけに切りつけた播磨赤穂藩5万石の藩主浅野内匠頭はその日のうちに、このあたりにあった陸奥一関藩田村右京大夫建頭たむらうきょうのだいふたけあきの上屋敷に送られて切腹し、赤穂藩は改易かいえきとなりました。内匠頭は座敷ではなく庭で切腹し、夕方に浅野家大臣かたおかげんごえもんの片岡源五右衛門・磯貝十郎左衛門いそがいじゅうろうざえもんらが遺体を引き取り、泉岳寺せんがくじで葬儀を執り行ったといわれています。

日比谷通り沿いに「浅野内匠頭終焉之地」という石碑が建っています。また、実際の田村家上屋敷は日比谷通りから20mほど東側(およそ現在の新橋4-2~4、28~30)にありました。

都指



せんごくほうぎのかみてい

仙石伯耆守邸跡

所 虎ノ門2-8

コース②

元禄15年(1702)12月15日未明に吉良邸に討ち入り、吉良上野介きらくずけのすけの首級をあげた赤穂義士は主君浅野内匠頭あさのたくみのかみが眠る泉岳寺せんがくじへ向かいました。その途中、統領大石内蔵助おおいしくらのすけよしとか副統領格の吉田忠左衛門よしだちゆうざえもんとみのもりすけに富森助右衛門とみのもりすけをつけて、大目付おおめつけ(大名を監視する幕府の役職)仙石伯耆守久尚邸せんごくほうぎのかみひさなおに出頭させました。赤穂義士は内匠頭の墓前で報告を済ませた後、寺坂吉右衛門てらさかきちえもんを除く46人が仙石邸に出頭しました。仙石伯耆守はすぐに江戸城に登城し、老中に報告しました。そして老中の協議と將軍綱吉つなよしへの報告を経て、赤穂義士はそれぞれ細川家、毛利家、松平家、水野家の各藩邸に預けられることになりました。

都指

みよし 三次藩浅野家屋敷跡 (氷川神社)

所 赤坂6-10-12

コース3

赤穂事件が起きた元禄時代、このあたりは浅野^{あさのあきのかみ}安芸守(広島藩、浅野^{あさの}本家)、浅野^{たくみのかみ}内匠頭(赤穂藩)、浅野^{あさのとさのかみ}土佐守(三次藩)、浅野^{あさのしきぶのしょう}式部少輔(浅野土佐守の義父)などの屋敷がありました。8代将軍^{とくがよしむね}徳川吉宗の頃、ここに氷川神社が建立されましたが、元禄当時は浅野土佐守の屋敷であったと思われます。

元禄14年(1701)3月14日、浅野内匠頭^{まつのおおろうか}は江戸城松之大廊下^{きらくこうげのすけ}で吉良上野介に切りつけ、その日のうちに切腹しました。正室(夫人)^{あぐり}の阿久里は髪を下ろして瑤泉院と改め、翌15日に実家の三次藩邸に引き取られました。 都指



赤穂義士10名切腹の地跡 (毛利庭園)

所 六本木6-9

コース4

江戸時代、この辺りには長門長府藩毛利家の上屋敷がありました。ここには赤穂義士47人のうち、岡嶋^{おかじま}八十右衛門^{やそえもん}ら10人が預けられ、義士らが預けられた大名家の中でも特に待遇が厳しかったといわれています。元禄16年(1703)2月4日に切腹しました。このうち、間新^{はざましんくろう}六郎^{かいやく}は介錯を潔とせず、真の切腹をしたといわれ、遺体は親族に引き取られ築地本願寺に葬られました。

平成15年(2003)、長府藩毛利家の屋敷跡は六本木ヒルズとして様変わりしました。その開発事業の中で、大名庭園の手法を取り入れた毛利庭園が整備されました。 都指



元禄赤穂事件の故地をゆく

赤穂義士9名切腹の地跡 (水野監物邸跡)

所 芝5-20-20

コース⑤

きらくずげのすけ おおめつけ
吉良上野介を討ち取り、大目付に出頭した赤穂義士は4家の大名に預けられます。その1家が三河岡崎藩水野家で、9名が預けられ、元禄16年(1703)2月4日に切腹しました。水野家の中屋敷は説明板の建っている所より50mほど北側にあります。

なお、赤穂義士を預かった大名家のうち、細川家と水野家では彼らを丁重に扱ったといわれており、「細川(細川越中守)の水(水野監物)流れは清けれどただ大海(毛利甲斐守)の沖(松平隠岐守)ぞ濁れる」という落首から当時の世評がうかがえます。 [都指]

おおいしちから 大石主税ら切腹の地跡

所 三田2-5-4

おおいしくらのすけ
ここは大石内蔵助の子息主税ら赤穂義士10名が預けられ、元禄16年(1703)2月4日に切腹した伊予松山藩松平家の中屋敷があった場所です。義士が切腹した場所は土を掘りあげて池とし、その土で築山を造ったといわれています。後に築山の上には徳富蘇峰(とくとみ そほう せんぶん)の撰文による碑が建てられました。現在、イタリア大使館の敷地内に建っています(ただし、参観はできません)。

討ち入りに参加した義士の中には、10代の青年が二人いました。大石主税と、水野家にお預けとなった矢頭右衛門七です。右衛門七は18歳、16歳の主税は義士中最年少でした。 [都指]



おおいしくらのすけ

大石内蔵助ら切腹の地跡

所 高輪1-16-25

コース⑥

このあたりには肥後熊本藩細川家の下屋敷がありました。吉良邸に討ち入り後、統領大石内蔵助ら17名が預けられ、元禄16年（1703）2月4日に切腹した場所です。切腹の跡地として高松中学校の敷地の一部を堀で囲って保存しています。

先年、同屋敷の北端に当たる地点で発掘調査が行われました。この折、19世紀に埋め潰された井戸から、浅野内匠頭の辞世、大石内蔵助の歌を染め付けた磁器の酒坏が出土しました。赤穂事件が、人々の心に長く記憶されてきたことを物語っています。

都指



磁器酒坏



せんがくじ

泉岳寺

所 高輪2-11-1

コース⑦

泉岳寺は慶長17年（1612）に外桜田に創建された曹洞宗寺院です。寛永18年（1641）の寛永の大火で焼失し、3代将軍徳川家光により、現在の高輪の地に再建されました。この時、家光は毛利・浅野・朽木・丹羽・水谷の5大名に泉岳寺再建を行わせました。この縁により浅野家は泉岳寺を江戸における菩提寺とするようになりました。泉岳寺は曹洞宗江戸三箇寺の1つとして多くの学寮とくがわいえみつや子院を抱える大寺院でした。

泉岳寺の名を世に広めたのは、やはり元禄赤穂事件と『忠臣蔵』ブームでしょう。江戸時代から多くの人々が参詣に訪れ、今も毎年4月初旬と12月14日に義士祭が行われています。また、赤穂義士ゆかりの品々が赤穂義士記念館に展示されています。

赤穂義士記念館

開館時間：9:00～15:30

料 金：大人500円、中高生400円、小人（10歳以上）250円、小人（10歳未満）無料
団体30名様以上割引あり

問い合わせ：03-3441-5560（泉岳寺）



慶長8年（1603）、徳川家康が江戸に幕府を開き、日本には「平和」の時代が訪れます。それから260年あまりが過ぎ、時は幕末を迎えます。幕府権力の衰退、黒船の来航などをきっかけに攘夷運動、尊皇運動、そして倒幕運動へと時代は流れていきます。この激動の時代の中で重要な舞台となった場所が港区には数多くあります。

外国からの大きなインパクトはやはり嘉永6年（1853）6月3日に浦賀沖に現れたペリー率いる4隻のアメリカ艦隊でしょう。「泰平の眠りを覚ます上喜撰（蒸気船）たった四杯で夜も眠れず」という狂歌が詠まれたように、幕府だけでなく世の人々を驚かせ、日本を鎖国から開国へと導きます。ペリーの再来航に備えて幕府が急いで造った防衛施設が台場で、現在、多くの人々で賑わう「お台場」の地名の由来となっています（→28ページ）。今は2基が国の史跡として

保存されていますが、当時の土木技術の高さをうかがうことができます。

一方、日本国内では徳川幕府と薩摩藩・長州藩などの西国雄藩との軋轢、攘夷運動・尊皇運動の激化、治安の悪化など大きく揺れ動きます。港区には幕末政治史の舞台や主役といえる人々のゆかりの地があります。特に幕末から明治維新にかけて中心的役割を果たした薩摩藩の屋敷

が複数存在し、様々な事件の舞台となりました。現在の芝2～3丁目あたりには約25,000坪の広大な居屋敷があり、戊辰戦争のきっかけとなった薩摩藩邸焼き討ち事件が起きました（→30ページ）。また、現在のJR田町駅前（芝5丁目）には抱屋敷、JR品川駅前（高輪3丁目）には下屋敷があり、いずれも勝海舟と西郷隆盛が江戸城総攻撃前に会見し、江戸城の無血開城が決められた場所です（→30ページ）。

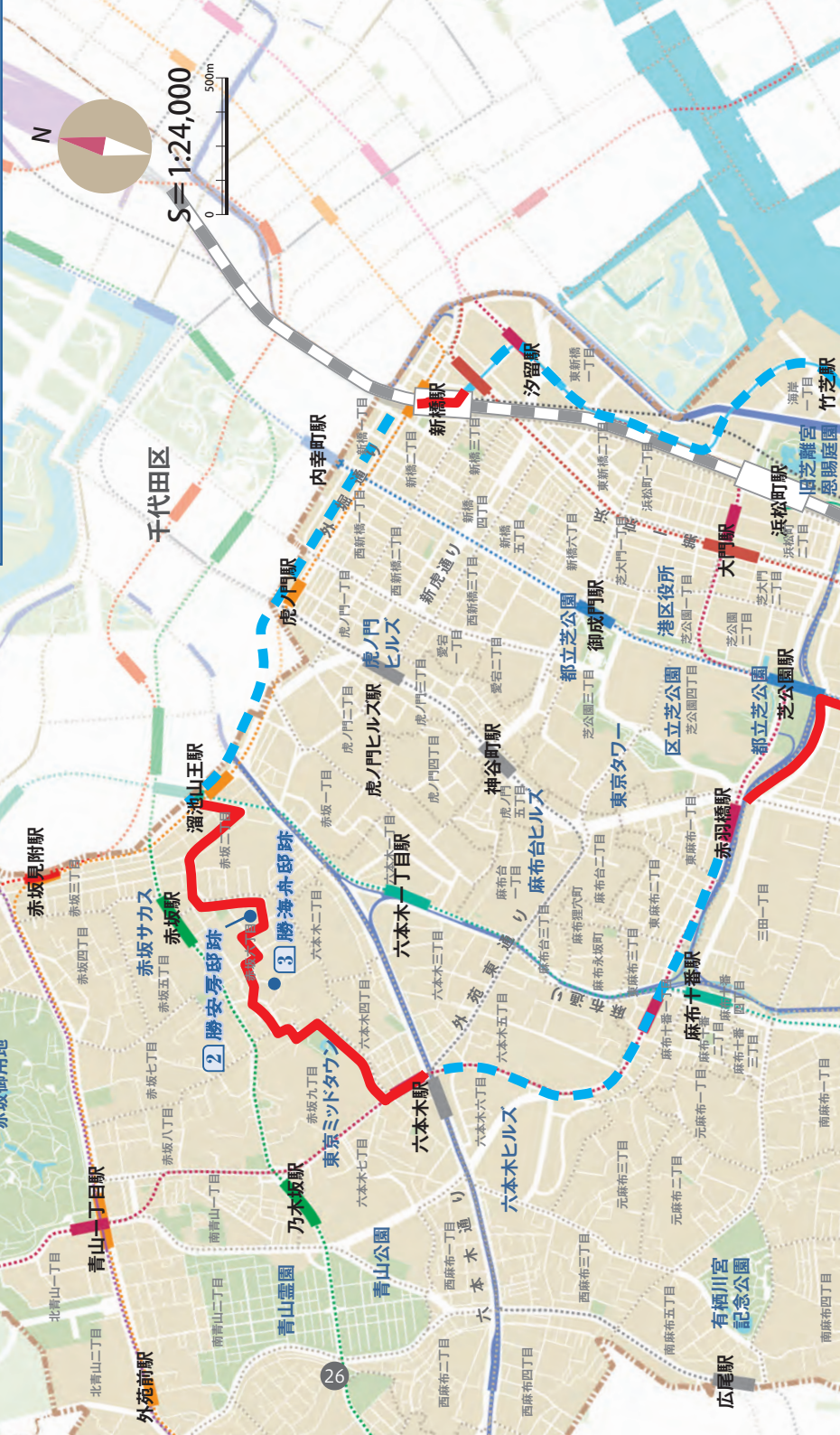
また、この時代の幕府側の重要人物として最初に名前があがる勝海舟は永らく赤坂に住んでいました。居宅は時代によって移りますが、坂本龍馬との出会いで有名な屋敷や、明治維新後、亡くなるまで住んだ屋敷も赤坂にありました（→28、29ページ）。幕末から明治維新へと移りゆく時代の中で転換となった歴史的事件を追いかけてながら散策してみるのもよいでしょう。



品川大筒町御台場出来之図

港区事件簿

港区事件簿を追って
幕末・維新事件簿



千代田区

S=1:24,000
0 500m



[1] 赤坂見附駅
赤坂一丁目
赤坂二丁目
赤坂三丁目
赤坂四丁目
赤坂五丁目
赤坂六丁目
赤坂七丁目
赤坂八丁目
赤坂九丁目

[2] 赤坂サカス
赤坂一丁目
赤坂二丁目
赤坂三丁目
赤坂四丁目
赤坂五丁目
赤坂六丁目
赤坂七丁目
赤坂八丁目
赤坂九丁目

[3] 勝海舟邸跡
六本木一丁目
六本木二丁目
六本木三丁目
六本木四丁目
六本木五丁目
六本木六丁目
六本木七丁目
六本木八丁目
六本木九丁目

26

有栖川宮
記念公園

赤坂見附駅

赤坂サカス

勝海舟邸跡

赤坂見附駅

赤坂見附駅

赤坂見附駅

赤坂見附駅

赤坂サカス

勝海舟邸跡

赤坂見附駅

赤坂見附駅

赤坂見附駅

赤坂見附駅

赤坂見附駅

赤坂サカス

勝海舟邸跡

赤坂見附駅

赤坂見附駅

赤坂見附駅

赤坂見附駅

幕末・維新事件簿

品川台場(第三・第六)

所 台場1-10、1-11

コース①

嘉永6年(1853)6月3日、浦賀沖に現れたペリー率いる4隻のアメリカ艦隊、俗にいう「黒船」は幕府や世の人々に衝撃を与えました。翌年の再来航に備え、海防のため急いで築かれたのが台場です。幕府は伊豆韮山代官の江川英龍に命じ、品川沖に洋式の海上砲台を築造させます。当初は11基を一定の間隔で建設する予定でした。嘉永7年(1854)4月に第一、第二、第三、11月に第五、第六と御殿山下砲台が完成しましたが、すでに同年の3月3日には日米和親条約が締結されたため、2基は途中で工事中止、残る4基の建設は行われませんでした。台場建設に用いる石材は伊豆半島や房総半島から運び、埋め立てに用いる土は御殿山や泉岳寺裏の山を切り崩し、総額75万両、5千人の人夫を動員した大土木工事でした。太平洋戦争後、第一・二・五台場は廃棄され、今は第三・第六台場が国の史跡として保存されています。 [国指定]



勝安房邸跡

所 赤坂6-6-14

サン・サン赤坂

コース②

ここは勝海舟が明治5年(1872)から同32年(1899)に77歳で死去するまで住んだ場所です。海舟は明治維新後、旧幕臣の代表格として外務大丞、兵部大丞、海軍大輔、参議兼海軍卿、元老院議員、枢密顧問官を歴任し、伯爵に叙されました。ただし、積極的に仕事をしたわけではなかったそうです。一方、新政府に対する批判や日清戦争に反対するなどその舌鋒は衰えることはなく、また、旧幕臣の就労先の世話や資金援助などに努めたそうです。晩年は『吹塵録』、『海軍歴史』、『陸軍歴史』、『開国起源』、『氷川清話』などの執筆や編纂にあたりました。明治32年(1899)1月19日、風呂上がりでブランドーを飲んだところで脳溢血になり、21日にこの地で死去しました。最後の言葉は「コレデオシマイ」だったそうです。 [都指定]



かつかいしゅう

勝海舟邸跡

所 赤坂6-10-39

コース3

ここは勝海舟が安政6年(1859)から明治元年(1868)、37歳から46歳まで住んだ場所です。安政7年(1860)、海舟にちべいしゅうとうつうしょうじょうやく ひじゆんしよは日米修好通商条約の批准書を交換する遣米使節団の護衛のため、咸臨丸の艦長かんりんまる(実際の肩書きは「軍艦操練所教授方頭取」)として渡米しました。帰国後、蕃書調所とうどり こうぶしよほうじゆつしはん頭取、講武所砲術師範などを歴任し、文久2年(1862)に軍艦操練所頭取を経て軍艦奉行に就任します。同じ年の11月、坂本龍馬らが海舟を斬ろうと面会を申し入れ、逆に感化されたのもこの屋敷です。また、慶応4年(1868)3月に西郷隆盛さいこうたかもりと会談し、江戸城の無血開城を決定した時もこの屋敷に住んでいました(→30ページ)。その後、同年7月に徳川慶喜とくがわよしのぶに従って駿府(現静岡市)に移るまで住みました。 [区図]



ヒュースケン暗殺事件跡

所 三田1-2、3、4

万延元年(1860)12月5日、アメリカ公使館通訳官ヒュースケンあかぼねせつこうは赤羽接遇所しよから麻布善福寺の公使館に帰る途中、待ち伏せていた攘夷派浪士伊牟田尚平・樋渡八兵衛ひょうい いむたしやうへいらに襲われ命を落としました。場所は新堀川に架かる中ノ橋ひわたりはちべえ しんぼりかわの北側付近で、ヒュースケンは即死はまめがれましたが、医師の手当でも及ばず翌日死去しました。28歳でした。この時、警備にあたっていた幕府外国奉行支配手附がいてくぶぎょうしはいてつけの鈴木善之丞すずきぜんじやうらは襲撃者に抵抗せず逃げたため、諸外国の代表は外交官警固の不備を強く非難するとともに横浜に退去し、大きな外交問題へ発展します。これに対して幕府は外交官の警固と公使館の警備を強化し、またアメリカ側の要求によりヒュースケンの遺族に1万ドルを支払って事件を落着させました。ヒュースケンは3日後の12月8日に麻布の光林寺こうりんじ(南麻布4-11-25)に葬られました(→36ページ)。

幕末・維新事件簿

薩摩藩邸焼き討ち事件跡

所 芝3-23・33、芝5-7付近

コース④

現在の芝2・3丁目の大半と4・5丁目の一部は、江戸時代、薩摩藩島津家の広大な居屋敷でした。慶応3年(1867)10月14日、大政奉還により徳川慶喜は政権を朝廷に返しましたが、依然として旧幕府と薩摩藩・長州藩は緊張した関係にありました。複雑な政治情勢の中、薩摩藩らは旧幕府軍と交戦する大義名分を得るべく、慶喜ら旧幕府首脳の大半が不在であった江戸で戦意を煽る工作活動を行います。その拠点となったのがこの藩邸でした。そして薩摩藩が江戸市中取締の庄内藩屯所を襲撃したため、その報復として同年12月25日に庄内藩らがここを攻撃し、藩邸は砲火によって焼失しました。この事件は戊辰戦争のきっかけの1つになりました。藩邸の痕跡は今では残されていませんが、芝3丁目23・33の一面に「薩摩小路」の名称がつけられ、往時を偲ぶことができます。



勝海舟・西郷隆盛会見の地跡

所 芝5-33

コース⑤

慶応4年(1868)3月13・14日、徳川家側の^{おおく ぼいちおう ただひろ}大久保一翁(忠寛)・勝海舟と官軍側の西郷隆盛が会見しました。すでに3月9日に徳川家の^{やまおかてつしゅう}山岡鉄舟が駿府(現静岡市)に赴き、西郷と会見して交渉の下ごしらえをしていました。15日の江戸城総攻撃直前の13日に予備的な会談を薩摩藩の拝借地で行い、翌14日にこの碑が建っている薩摩藩抱屋敷で最終的な話し合いが行われました。その結果、江戸城総攻撃は中止され、江戸は戦火から救われました。この地は江戸城の無血開城という歴史上重要な決定が下された場所なのです。なお、勝海舟はこの会談が破談したときは、江戸の町を焼き払い官軍の侵攻を止める作戦を練り、準備を進めていたそうです。江戸城は4月11日に開城し、大総督府が接収しました。

〔都庁〕





時代の夜明けを たどる旅

時代の夜明けを たどる旅

幕末外交史跡をゆく

二百数十年の鎖国の時代を経て、嘉永7年（1854）3月3日の日米和親条約締結をもって日本は開国の時代を迎えました。安政5年（1858）、アメリカとの日米修好通商条約を皮切りに、オランダ・ロシア・イギリス・フランス・ポルトガル・プロイセン・スイス・ベルギー・イタリア・デンマークなど欧米諸国と条約を締結します（国名は調印順）。条約では自由貿易とともに公使などの外交使節を江戸に駐在することも取り決められました。この公使駐在をめぐっては、すでに日本に滞在していたアメリカ総領事ハリスが幕府に強く要求し、交渉していました。一方、要求を受けた幕府では外交のエキスパートである水野みずのただのり忠徳（勘定奉行兼長崎奉行）と岩瀬いわせただなり忠震（目付）に意見を求め、協議の結果、認めることにしました。

問題は外国公館をどこに置くかでした。公館は主に現在の港区域の寺院に設けられましたが、その理由としては、①江戸の南端に位置し、海に面して外国人たちの上陸地点に近いこと、②寺院が数多くあり、多人数からなる使節に必要な設備を整えるの

に適していること、③外国使節を接遇するのにふさわしい格を備えていること、④警備をする上で十分な空間が確保できることなどが挙げられます。とりわけ攘夷運動じょういが盛んになってきたこの時期、幕府は使節団の警備に神経を使い、広い敷地を持ち、かつ外界と遮断された寺院を宿舍や公使館に選んだのです。しかし、外国人襲撃事件が横浜や江戸で相次いだため幕府はさらに警備を強化します。とくに万延元年（1860）12月5日に麻布中ノ橋付近で起きたアメリカ公使館通訳官ヒュースケン暗殺事件（→29、36ページ）は大きな外交問題に発展し、幕府は旗本・御家人から人員を抜擢して外交官個人の警固を強化し、公館全体の警備は大名に担当させました。それでも攘夷運動はますます激しさを増し、文久元年（1861）から翌2年（1862）にかけて起きた東禅寺事件（イギリス公使館襲撃事件、→37ページ）や品川御殿山イギリス公使館焼き討ち事件などによって、外国公使らは安全かつ生活に便利な横浜へ居を移し、港区域の寺院は江戸に出府した時の滞在施設として利用されることとなります。

コースルート・所要時間

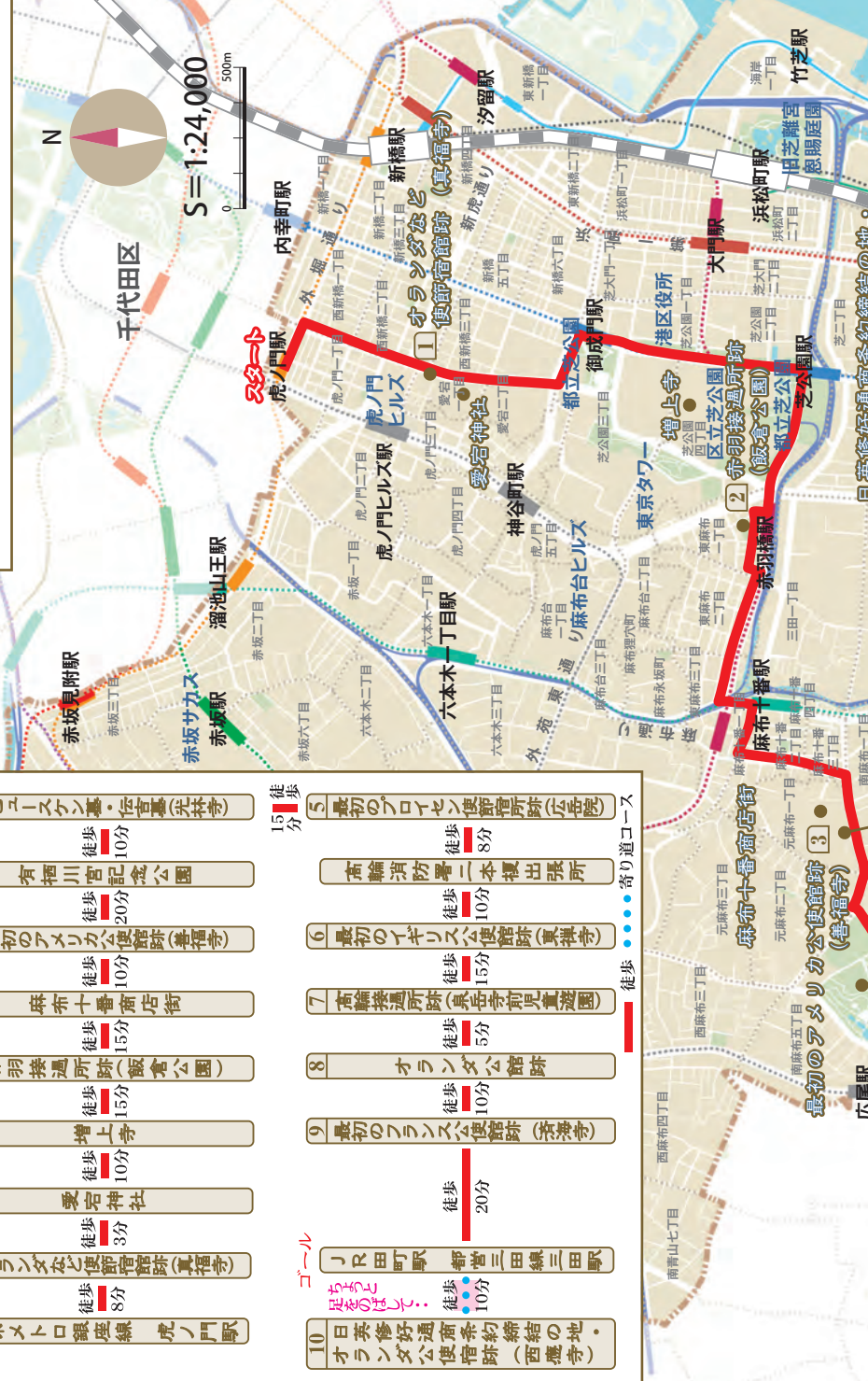
時代の夜明けを
たどる旅

幕末外交史跡をゆく



スタート

- 1 東京メトロ銀座線 虎ノ門駅
徒歩 8分
- 2 オランダなど使節館跡(真福寺)
徒歩 3分
- 3 愛宕神社
徒歩 3分
- 4 増上寺
徒歩 10分
- 5 赤羽接遇所跡(飯倉公園)
徒歩 15分
- 6 麻布十番商店街
徒歩 15分
- 7 最初のアメリカ使館跡(善福寺)
徒歩 10分
- 8 有栖川宮記念公園
徒歩 20分
- 9 ヒューストン墓(伝言臺(先林寺))
徒歩 10分
- 10 最初のプロイセン使節館跡(伝言臺)
徒歩 8分
- 11 高輪消防署(二本榎出張所)
徒歩 10分
- 12 最初のイギリス公使館跡(真福寺)
徒歩 15分
- 13 高輪接遇所跡(真福寺前児童遊園)
徒歩 5分
- 14 オランダ公使館跡
徒歩 10分
- 15 最初のフランス公使館跡(善福寺)
徒歩 20分
- 16 JR田町駅 都営三田線 三田駅
徒歩 10分
- 17 ちきよ足あはし
徒歩 10分
- 18 日英修好通商条約締結の地(西壺寺)
徒歩 10分





渋谷区

目黒区

品川区

- 路線区
- 都営浅草線
 - 都営三田線
 - 都営大江戸線
 - JR線
 - 京浜急行線
 - 東京メトロ銀座線
 - 東京メトロ日比谷線
 - 東京メトロ千代田線
 - 東京メトロ有楽町線
 - ゆりかもめ
 - 東京モノレール

幕末外交史跡をゆく

オランダなど使節宿館跡 (真福寺)

所 愛宕 1-3-8

コース①

安政5年(1858)3月から6月まで、オランダ使節クルチウスが逗留したのが愛宕山下の真福寺(慶長10年〈1605〉建立)です。クルチウスは長崎出島の商館長でもありましたが、この時は領事官の肩書きを持っていましたため、幕府は市中の旅館は適当ではないと判断し、真福寺を宿所にあてました。真福寺はこの辺りでは江戸城にもっとも近い寺院で、門前の愛宕下通りを進めば500mほどで城門(新シ橋)につきあたります。クルチウスは日蘭修好通商条約が締結される前にここを去りましたが、その後も真福寺には修好通商条約を結ぶために訪れたロシア使節プチャーチンやフランス使節グローなどが滞在しました。



あかばねせつぐうしよ 赤羽接遇所跡 (飯倉公園)

所 東麻布 1-2-1-8

コース②

赤羽接遇所は安政6年(1859)3月に講武所付属調練所の跡地2,856坪に建てられた外国人の宿泊所兼応接所です。黒門と高い板塀で囲まれ、内部には宿泊施設のほか、幕府役人の詰所や^{うまや}厩、警備の番所などが置かれていました。翌7年(1860)1月にロシア領事ゴスケビッチが滞在したほか、同年7月にはプロイセン使節オイレンブルクが滞留し、幕府と修好通商条約の締結を交渉しました。施設についてオイレンブルクは「家全体の設備はいささかテントのようであるが、快晴で暖かい天気のとときはともかく快適な住み心地である」と感想を述べています(『オイレンブルク日本遠征記』中井晶夫訳)。また、文久元年(1861)5月から10月まで再来日したシーボルトも滞在し、幕府顧問として活躍するなど、幕末外交の舞台となりました。

区室



最初のアメリカ公使館跡 (善福寺)

所 元麻布1-6-21

コース③

安政3年(1856)7月、下田に来航したアメリカ総領事ハリスは修好通商条約の締結を幕府と交渉し、同5年(1858)6月19日に小柴沖(神奈川付近)に停泊中の米艦ポーハタン号上で日米修好通商条約の調印がおこなわれました。翌6年(1859)、駐日公使に昇格したハリスは、6月8日に通訳ヒュースケンをともない善福寺に入り、ここに公使館を開きました。当初は奥書院と客殿が公館に用いられていましたが、文久3年(1863)水戸藩士の放火により焼失したため、本堂の北側の庫裏を使用するようになったと思われます。境内には益田孝ますだ たかしが発起人となって昭和11年(1936)に建立したハリス記念碑があります。また、当時の善福寺やくそうの役僧が記した「亜墨利加ミニストル旅宿記」(区指定文化財、非公開)など幕末の外交史を知る上で貴重な資料も残されています。

部指



プロイセン公使館跡

所 元麻布1-5 春桃院跡

慶応2年(1866)3月、プロイセン使節の宿所はそれまで利用していたこうがくいん広岳院(→36ページ)からここ春桃院(元和8年<1622>開創・当初は自適庵、後に現称)に移されました。駐日領事プラントは翌3年(1867)3月に代理公使に昇任し、幕府と交渉するためここを宿舍とし、プロイセン公使館となりました。公使館として使用されていた建物は本堂続きの127坪と山寄りの51坪の2棟であったといわれています。春桃院は昭和末期までこの地にありましたが、現在は南麻布に移転しています。

幕末期駐日外交使節一覧(一部)

アメリカ	ハリス	総領事・弁理公使
	ブリュイン	弁理公使
	デビュー	弁理公使
	ヴァン・ファルケンブルグ	弁理公使
イギリス	オールコック	総領事兼外交事務官・特命全権公使兼総領事
	パークス	特命全権公使兼総領事
フランス	ド・ベルクール	総領事・代理公使兼総領事・全権公使兼総領事
	ロッシュ	代理公使兼総領事
オランダ	デ・ウィット	総領事
	ホルスブルック*	総領事兼外交事務官
ロシア	ゴスケビッチ	領事・総領事
	ビューツォフ	領事

- ・紙幅の関係で、安政5年(1858)に修好通商条約(安政の五カ国条約)を締結した国々に限定しました。
- ・ホルスブルックは、スイス総領事、デンマーク政府代表を兼任しました。
- ・『開国150周年記念資料集 江戸の外国公使館』(港区立港郷土資料館、2005)より作成しました。

幕末外交史跡をゆく

ヒュースケン墓・伝吉墓 (光林寺)

所 南麻布4-11-25

コース④

アメリカ総領事(のちに公使)ハリスにしたがって江戸に入った通訳官ヒュースケンの墓がここ光林寺(元和9年<1623>開創)にあります。ヒュースケンは万延元年(1860)12月5日の夜、赤羽接遇所あかほせつぐうしょから麻布善福寺あざふせんぶくじの公使館に帰る途中、待ち伏せていた攘夷派浪士に襲われ命を落としました(→29ページ)。葬儀は3日後に行われ、葬列にはハリス、オールコック(イギリス公使)、ド・ベルクール(フランス代理公使)、デ・ウィット(オランダ総領事)、オイレンブルク(プロイセン使節)など各国の公使・総領事・使節が参加しました。ヒュースケンはキリスト教徒であったため、土葬のできる御府外の光林寺に埋葬されました。また、同年1月7日に東禅寺とうぜんじ付近で殺害されたイギリス総領事つうべん雇いの通弁(通訳)伝吉の墓もここにあります。 区指



最初のプロイセン使節 宿所跡(広岳院)

所 高輪1-24-6

コース⑤

万延元年(1860)12月14日、赤羽接遇所あかほせつぐうしょにおいて幕府とプロイセンとの間で日普修好通商条約が結ばれました。プロイセン使節オイレンブルクは同18日に赤羽接遇所を引き払い、一旦帰航します。その後、元治2年(1865)4月3日に幕府がプロイセンの宿所としたのがここ広岳院(文禄3年<1594>開創・当初は宗英寺、後に現称)です。領事ブランドがここに入りましたが、翌2年(1861)2月にプロイセンの宿所は麻布の春桃院しゅんとういん(→35ページ)に移されたため、実際に使用したのは短い期間でした。



最初のイギリス公使館跡 (東禅寺)

所 高輪3-16-16

コース⑥

日英修好通商条約が締結された翌年の安政6年(1859)6月4日、イギリスの駐日総領事(のちに公使)オールコックが東禅寺(慶長15年〈1610〉開創。当初は嶺南庵、寛永13年〈1636〉後に現称)に入り、ここに総領事館(のちに公使館)を置きました。当時はすぐそばに海が面しており、通信や連絡が容易な場所でした。またオールコックは「江戸にある最大かつ最良の寺のひとつ」「これほど美しい草庵をえらべたことはさいわい」(『大君の都』山口光朔訳)など、とても東禅寺を気に入ったようでした。しかし、ここ東禅寺を舞台に血なまぐさい事件が相次いで起こります。

文久元年(1861)5月28日の夜、水戸藩を脱藩した攘夷派浪士10数名がここを襲撃しますが、警護についていた幕府の外国御用出役や諸藩の藩士が必死に防ぎ、襲撃者を撃退しました。この時、オールコックは危うく難を逃れましたが、書記官ローレンス・オリファントと長崎駐在領事ジョージ・モリソンが負傷しました。また、1年後の5月29日、警護についていた松本藩の藩士がイギリス人伍長を殺害し、歩哨1人を傷つけました。藩士は翌日藩邸で切腹しましたが、イギリス側は幕府

に償金を要求し、続いて起きた生麦事件とともに幕府を悩ませることになります(東禅寺事件)。事件後、イギリスは横浜に公使館を移し、東禅寺はその後公使館としてほとんど利用されなくなります。なお、元治2年(1865)から高輪接遇所(→38ページ)が実質的なイギリス公使館として利用されます。

現在、公使館の一部として使用された奥書院(現在は遷源亭せんげんていと呼ばれています)が保存されており、公使宿館跡の碑が山門前にあります。

国指



広重 東京名勝図会 高輪 英吉利館



幕末外交史跡をゆく

たかなわせつぐうしょ

高輪接遇所跡

(泉岳寺前児童遊園)

所 高輪2-15-37

コース⑦

接遇所とは外国人のための宿泊所兼応接所ですが、高輪接遇所は実質的なイギリス公使館です。イギリス公使は東禅寺^{とうぜんじ}事件（→37ページ）など度重なる襲撃により横浜に移っていましたが、元治2年（1865）2月に代理公使ウィンチェスターが泉岳寺を公使館とすることを幕府に求めます。さらに同年閏5月に着任した新公使パークスは泉岳寺中門前の敷地に公使館を建設するよう求めました。幕府はイギリス側の強い要求に押され、もと泉岳寺の土取り場^{じょうい}2,659坪の地にイギリス公使館を建設し、攘夷派の焼き討ちを避けるため、「高輪接遇所」と名付けました。敷地内には平屋建て2棟の公使館が建てられ、1棟が公使パークスのために、1棟が公使館員用にあてられました。イギリス公使館通訳官のアーネスト・サトウも一時期ここに住んでいました。明治時代以降、新たな名所として錦絵にも描かれています。



オランダ公館跡

所 高輪2-1-11

長応寺跡

コース⑧

オランダは江戸時代、徳川幕府の鎖国政策の中にあって西欧諸国で唯一日本と交易していた国です。オランダは修好通商条約締結後、外交使節を江戸に置かず、江戸時代以来の長崎出島を本拠としていましたが、総領事が江戸に出府した時に利用していたのがここ長応寺です。文久3年（1863）に総領事を引き継いだポルスブルックは出島から横浜に本拠を移しましたが、江戸の公館として長応寺を引き続き利用しました。ポルスブルックはスイス、ベルギー、デンマークなどの国々と幕府の条約締結を積極的に周旋したため、長応寺はこれらの諸国と日本との外交交渉の舞台にもなりました。

外国公館警衛大名一覧

藩名	藩主	警衛公館（宿所）
越後与板	井伊直充・直安	長応寺・善福寺
肥前島原	松平忠愛	善福寺
三河西尾	松平兼全	長応寺・東禅寺
越後福山	阿部正教	東禅寺
伊勢龜山	石川総祿	済海寺
摂津尼崎	松平忠栄	済海寺
出羽新庄	戸沢正実	赤羽接遇所
和泉岸和田	岡部長寛	東禅寺
上野高崎	松平権声	善福寺
大和郡山	松平（柳沢）保申	東禅寺
上野沼田	土岐頼之	赤羽接遇所
美濃岩村	松平乗命	赤羽接遇所・東禅寺
摂津高槻	永井直耀・直矢	善福寺
美濃加納	永井尚典	善福寺
上野館林	秋元志朝	善福寺
越後高田	榑原政愛	東禅寺
丹後田辺	牧野誠成	済海寺
信濃松本	松平（戸田）光則	済海寺・東禅寺
下野宇都宮	戸田忠恕	善福寺

スイス使節宿所跡

所 三田4-8 しょうせんじ 正泉寺跡

文久3年(1863)12月29日、日瑞修好通商条約を結んだスイスは、翌元治元年(1864)、領事リンダウがフランス・オランダ公使館の近辺に滞在施設を求めました。この求めに応じて幕府が宿所に定めたのがここ正泉寺です。当時の境内図をみると、見張り所が一番から八番まで設けられ、嚴重な警備体制を敷いていたことがうかがえます。ちなみにリンダウは作家でもあり、日本最古の英字新聞社『ジャパン・タイムズ』の共同設立者です。また、リンダウの後任として駐日総領事をつとめたブレンワルドは在日外資系企業として古い歴史を持つDKSHジャパン株式会社(旧日本シベルヘグナー)の創始者の1人です。

最初のフランス公使館跡(濟海寺)

所 三田4-16-23 コース9

安政5年(1858)9月3日に日仏修好通商条約を結んだフランスは、初代駐日総領事ベルクールが翌6年(1859)8月10日に品川に来航して濟海寺(元和7年〈1621〉開創)に入り、ここに公使館を置きました。文久3年(1863)に新公使ロッシが着任すると、活発な外交活動を進めました。当時のヨーロッパの2大強国はイギリスとフランスでしたが、イギリスが薩摩藩など西国雄藩を支援するのに対抗し、フランスは積極的に幕府を支援し、幕府の軍制改革などに協力しました。明治3年(1870)に引き払うまで公使館として使われました。幕末から明治にかけての外交史を理解する上で欠くことのできない史跡といえるでしょう。

都指

藩名	藩主	警衛公館(宿寺)
陸奥福島	板倉勝頼	善福寺
陸奥三春	秋田肥季	善福寺
遠江横須賀	西尾忠篤	善福寺
美濃大垣	戸田氏彬	東禅寺
駿河田中	本多正訥	濟海寺・東禅寺
越後村上	内藤信忠	東禅寺
丹波篠山	青山忠敏	濟海寺
信濃上田	松平忠礼	善福寺
近江水口	加藤明軌	善福寺
越前勝山	小笠原長守	善福寺
若狭小浜	酒井忠氏	濟海寺・善福寺
常陸笠間	牧野貞直	善福寺
越前丸岡	有馬道純	善福寺・長応寺
陸奥白河	阿部正外	善福寺
美濃郡上(八幡)	青山幸宜	善福寺

『開国150周年記念資料集 江戸の外国公使館』(港区立港郷土資料館、2005)より作成



幕末外交史跡をゆく

日英修好通商条約締結 の地・オランダ公使宿跡 (西應寺)

所 芝2-25-6

コース10

安政5年(1858)7月8日、修好通商条約を結ぶためイギリス使節エルギン卿の一行が江戸に上陸し、滞在したのがここ西應寺(応安元年〈1368〉開創)です。エルギンは日米修好通商条約をモデルとすることを決めていたため、幕府との交渉は順調に進み、10日後の7月18日に西應寺で条約が締結されました。イギリス使節の一行には中国人やペットまでおり、寝る時はベッドに蚊帳をつるしたそうです。エルギンは滞在中の様子について、「この快い隠れ家は一方の側が寺院で、他のすべての側は高く築いた堤で外界から隔離されていた」と記し、同じく随員のオリファントは「われわれの部屋は中庭の一画になっていた。そこは芝生の庭園で、中央に蓮に覆われた池があり、そこにひなびた橋で渡る小島があった。とても大きな金魚が幅の広い蓮の葉の下に物憂げに浮かんでいた」と述べています(いずれも『エルギン卿遣日使節録』岡田章雄訳)。

また、翌6年(1859)9月1日からオランダ公使宿館がここに置かれました。書院および庫裏の2階などが使われ、初代公使クルチウスらが駐在しました。しかし、慶応3年(1867)12月25日の薩摩藩邸焼き討ち事件(→30ページ)の時、隣接していた西應寺も砲火によって全焼し、オランダ公館日誌などの貴重な資料が失われてしまいました。

〔都庁〕





明治時代の幕開けとともに、日本は殖産興業の道を歩み、慌ただしい近代化の波が押し寄せます。港区には日本の近代化を語る上で重要な史跡が数多くあります。これらは大きく、①産業・交通・通信、②医療・教育、③地方行政に分けられます。①産業・交通・通信の分野では、まず国指定史跡となっている旧新橋停車場跡があります（→51ページ）。明治5年（1872）に日本で初めて営業鉄道がスタートした記念すべき史跡です。通信の分野では東京放送局の仮局舎と本局社が設けられ、日本におけるラジオ放送が開始されました（→45、48ページ）。このほか、横浜・兵庫に続く日本3番目のガス事業が創業された地（→44ページ）や、全国紙『讀賣新聞』発祥の地（→52ページ）などがあります。

次に、②医療・教育の分野は近代史跡の中でも最も多い分野です。看護婦教育発祥の地（→49ページ）、歯科医学教育発祥の地跡（→46ページ）、東京大学医科学研究所（→46ページ）、北里研究所病院

（→47ページ）など、日本の近代医療の発展を支えた研究機関や教育機関があり、日本近代医療史を語る上で重要な地域であるといえましょう。教育機関としては、日本近代初等教育の幕開けとなる小学第一校が設けられた地があります（→49ページ）。また、日本の私立大学の代表校である慶應義塾大学（→50、60ページ）や、日本最古のミッションスクールである明治学院大学（→61ページ）、海軍将校の養成学校という特殊な役割を果たした攻玉社跡（→50ページ）などがあります。

③地方行政の分野では、明治11年（1878）7月22日に発布された^{ぐんくちょうそん}郡区町村編成法により設置された^{へんせいほう}麻布区、芝区、赤坂区の各区役所跡が史跡に定められています（→47、50、52ページ）。

このほか、南極探検隊記念碑（→44ページ）や、日本経緯度原点（→48ページ）など日本の近代化に重要な役割を果たした史跡があります。

時代の夜明けを たどる旅

時代の夜明けを
たどる旅
近代史跡



新宿区

渋谷区

千代田区

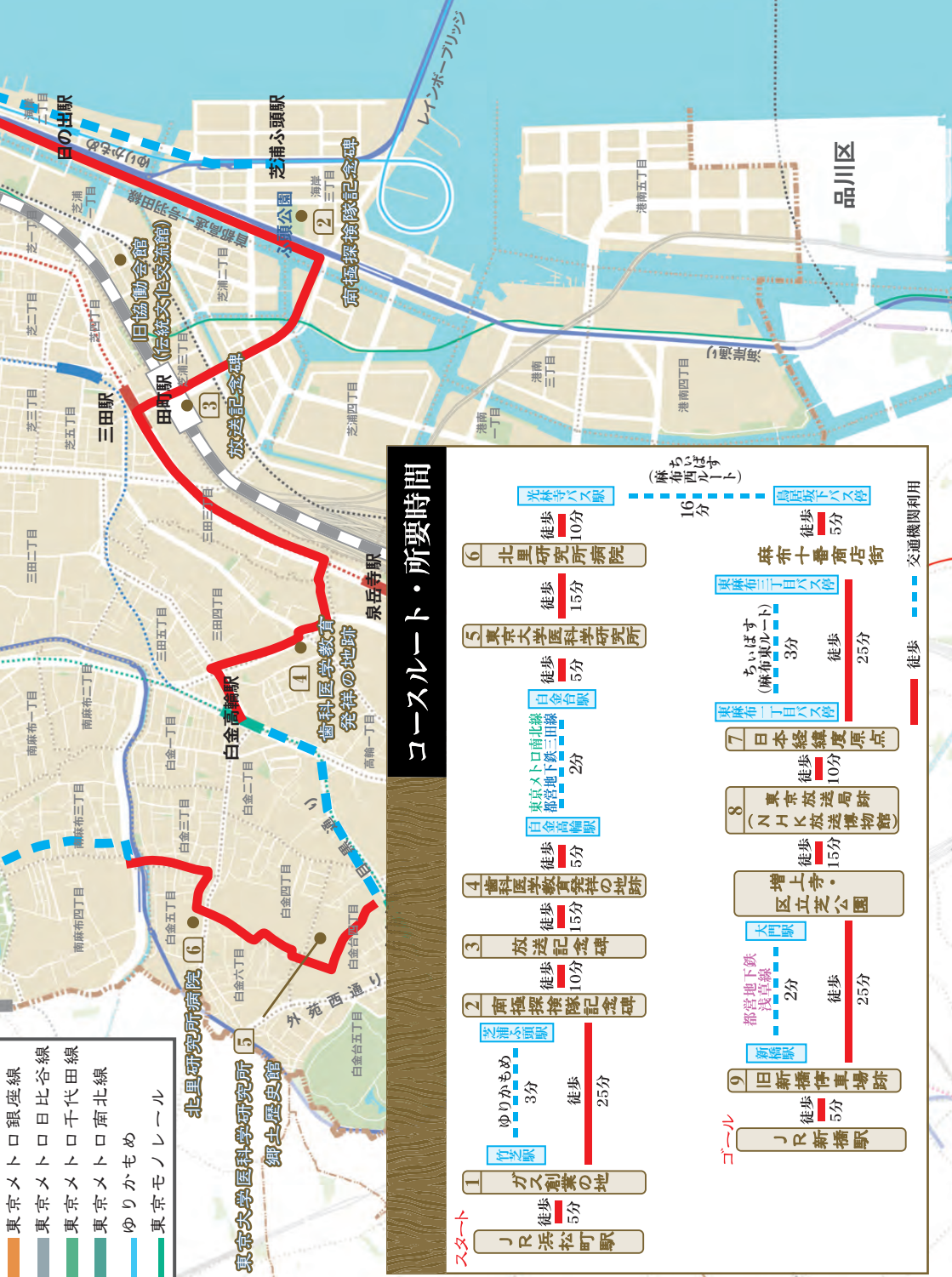


S = 1:24,000

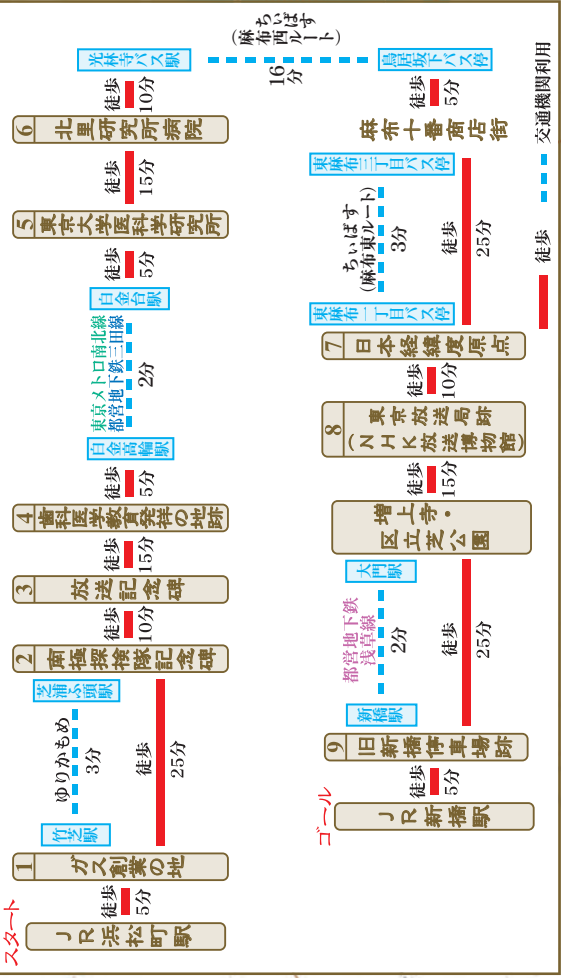


- 路線図
- 都営浅草線
 - 都営三田線
 - 都営大江戸線
 - JR線
 - 京浜急行線





コースルート・所要時間



近代史跡

ガス創業の地

所 海岸1-5-20
東京ガス

コース①

東京におけるガス事業は、明治6年（1873）11月、東京会議所が東京府にガス燈建設を出願し、12月12日に許可され本格的に開始されました。翌日、工業用地として芝浜崎町3番地（現海岸1-5）の11,300㎡の広大な土地が貸与されました。翌7年（1874）1月、フランス人技師プレグランを招き工場とガス燈の建設がはじまり、金杉橋から芝・銀座を経て京橋まで85本のガス燈が建てられました。12月15日に試燈火が行われた後、18日に新橋ー京橋間のガス燈が燈火され、横浜・兵庫に続く3番目のガス事業がはじまったのです。ガス燈1本の料金は1ヶ月3円55銭5厘（米約2俵分）とかなり高額でした。

区登



南極探検隊記念碑

所 海岸3-14-34

コース②

明治43年（1910）11月29日、日本最初の南極探検隊として陸軍中尉白瀬^{しらせのぶ}轟（1861～1946）らに乗せた木造船開南丸（204t）が芝浦埠頭を出航しました。途中、ニュージーランドのウェリントンやオーストラリアのシドニーに寄港して物資を積み込み、明治45年（1912）1月16日、ついに南極大陸に上陸しました。ちょうどその翌日にイギリスのロバート・スコットが南極点に到達したため、白瀬らは南極点到達を断念し、学術調査と領土の確保を目指しました。しかし、滞在に困難を極めたため、28日に南緯80度5分・西経156度37分の地点一帯を「大和雪原」と命名して、日章旗を掲げて日本領を宣言しました。これを記念して昭和11年（1936）12月20日にここに碑が建てられました。なお、ペンギン像は日本を代表する彫塑家朝倉^{ちようそか}文夫^{あさくらふみお}の作です。



放送記念碑

所 芝浦3-3 JR田町駅芝浦口ロータリー脇
コース③

日本におけるラジオの本放送は大正14年（1925）7月22日に愛宕山の東京放送局から発信されましたが（→48ページ）、前年の大正13年（1924）11月29日に東京放送局の仮局舎が当時東京高等工芸学校のあったこの地に設けられました。翌14年（1925）3月1日から試験放送が行われ、22日に仮放送がはじまりました。京田武男アナウンサーによる第一声は、「アアア、聞こえますか。JOAK、JOAK、こちらは東京放送局であります。こんにち只今より放送を開始致します」というものでした。日本の放送史上、記念すべき日といえるでしょう。愛宕山に正式な放送局が完成するまでここで仮放送が続けられました。ちなみに当時のラジオの波長は375m（周波数800kHz）、出力は220Wでした。受信機の性能に比べて出力が弱かったため、東京市内でないとよく聞こえなかったそうです。



旧協働会館 (伝統文化交流館)

所 芝浦1-11-15

港区立伝統文化交流館は、区指定有形文化財「旧協働会館」を活用して、令和2年（2020）に伝統文化の継承や地域活動、交流等のための施設として開館しました。

旧協働会館は昭和11年（1936）に芝浦花柳界の見番として建築された木造2階建ての建物で、大工棟梁は目黒雅叙園などの建築を手がけた酒井久五郎です。

玄関の唐破風や2階の百畳敷きの大広間など芝浦花柳界が華やかであった時代の姿を伝えています。戦時中に花街が疎開した後は平成12年（2000）まで港湾労働者の宿泊施設として利用され、協働会館と呼ばれていました。都内に残された唯一の木造建築の見番として貴重なものです。

区指

時間：10：00～21：00
休館日：12月29日～1月3日、臨時休館日
入館料：無料
電話：03-3455-8451



近代史跡

歯科医学教育発祥の地跡

所 三田4-18

コース④

ここは高山紀齋（1851～1933）が明治23年（1890）に高山歯科医学院（東京歯科大学の前身）を設立した場所です。岡山藩出身の高山紀齋は戊辰戦争に従軍した後、明治3年（1870）に上京して慶應義塾に入塾し、同5年（1872）にアメリカに留学して歯科医学を修めました。同11年（1878）に帰国し、銀座に歯科診療所を開きました。紀齋は日本における歯科医学の発展と後進の教育の必要性を感じ、明治23年（1890）にこの地に医学院を設立しました。また、日本歯科医学会を設立し、初代会長に就任しました。その後、医学院はちわきもりのすけ血脇守之助（1870～1947）に引き継がれました。血脇は日本の近代歯科医療制度の確立に尽力した歯科医で、野口英世のパトロンとしても知られています。その後、明治33年（1900）に神田小川町に移転しました。現在、伊皿子交差点前に記念碑が建っています。



東京大学医科学研究所

所 白金台4-6-1

コース⑤

東京医科学研究所は明治25年（1892）、ドイツ留学から帰国した北里柴三郎のために福澤諭吉が私財を投じて設立した私立衛生会附属伝染病研究所を起源とします。同32年（1899）に内務省管轄の国立伝染病研究所となりますが、これは伝染病研究は衛生行政と表裏一体であるべきという北里の理念に合致するものでした。ところが、大正3年（1914）に政府は北里に一切の相談もなく、研究所の所管を文部省に移し、東京帝国大学の下部組織にする方針を発表します。その結果、北里は研究所を去り、新たに北里研究所（→47ページ）を創設します。現在、構内にはうちだよしかず内田祥三設計の研究棟（現医科学研究所1号館、昭和12年〈1937〉建築）が残されています。また、正門のそばに近代医科学記念館があります。

近代医科学記念館

時間：10:00～12:00、13:00～16:00
 休館日：土・日祝日、夏期休業期間、年末年始
 その他臨時休館
 料 金：無料
 問い合わせ：03-5449-5470



北里研究所病院

所 白金5-9-1

コース⑥

「日本の細菌学の父」といわれる北里柴三郎(1853~1931)が大正3年(1914)に設立したのが北里研究所です。北里は明治8年(1875)東京医学校(現東京大学医学部)へ進学し、同18年(1885)からドイツのベルリン大学へ留学し、コッホに師事します。同22年(1889)に世界で初めて破傷風菌だけを取りだす純粹培養法に成功、翌23年(1890)には血清療法を開発します。同25年(1892)に帰国しますが、受け入れる機関がなく福澤諭吉が設立した私立衛生会附属伝染病研究所に入ります(→46ページ)。その後、大正3年(1914)に政府との軋轢から研究所を去り、私費を投じて11月5日に北里研究所を設立しました。以降、日本の細菌学・感染症学の発展に大きな役割を果たしています。構内に北里柴三郎記念室があり、北里の生涯やその功績を、貴重な資料や写真とともに紹介しています。

北里柴三郎記念博物館 展示室

時 間：10:00~17:00(入館は16:30まで)

休 館 日：土曜日(第2・4・5)

日曜日(第1・3・5)

祝日、年末年始、夏期休暇ほか

料 金：無料

問い合わせ：03-5791-6103



最初の麻布区役所跡 (龍澤寺)

所 元麻布3-10-5

明治11年(1878)7月22日の郡区町村ぐんくちやうそん編成法により、現在の港区域には赤坂区、麻布区、芝区が設けられました。麻布区の範囲は主に現在の麻布・六本木にあたります。ここ龍澤寺には明治6年(1873)12月に第二大区十二小区の区務所が置かれていましたが、これを麻布区の区役所として明治11年(1878)11月4日に開庁することになりました。初代区長には前田まえだ利充としみつが任命されました。開庁当時の戸数は7,813戸、人口は26,000人余でした。昭和22年(1947)3月15日、赤坂区・麻布区・芝区が統合し、現在の港区が誕生しました。



近代史跡

日本経緯度原点

所 麻布台2-18-1

コース⑦

日本経緯度原点は日本の経度と緯度を決める基準となるものです。昭和24年（1949）の測量法施行令により東経139度44分40秒5020、北緯35度39分17秒5148に定められましたが、平成13年（2001）の測量法の改正により最新の宇宙測地技術をもって新たに東経139度44分28秒8759、北緯35度39分29秒1572に改められました。さらに平成23年（2011）3月11日に起きた東北地方太平洋沖地震により、大きな地殻変動が発生したため、再測量を行い、東経が139度44分28秒8869に改められました。この場所には明治7年（1874）から海軍の気象台が置かれていましたが、同21年（1888）に内務省地理局天象台・東京帝国大学理科大学天象台と合併し、東京帝国大学付属の東京天文台が発足しました。しかし、関東大震災後、市街地化が進んだため観測に適さなくなり、天文台は三鷹市に移転しました。

区指

東京放送局跡
(NHK放送博物館)

所 愛宕2-1-1

コース⑧

大正14年（1925）7月12日、関東大震災で倒壊・焼失した愛宕塔と愛宕館の跡地に東京放送局（JOAK）の局舎が落成し、ラジオの本放送がはじまりました。場所は上野などほかにも候補がありましたが、広く電波を送信できる高台であることなどから愛宕山に決定しました。設計は東京タワーと同じ内藤多伸ないとうたちゅうが手がけ、鉄塔の高さは45m、塔の間は32.7m、出力1kw、周波数800kcでした。開局後はさまざまな放送が流され、昭和11年（1936）の二・二六事件で青年将校らに投降を呼びかける放送もここから流されました。昭和14年（1939）5月13日、千代田区内幸町に東京放送会館が完成し、愛宕山の東京放送局はその役割を終えます。昭和31年（1956）3月から世界初の放送博物館として開館しました。

平成28年（2016）1月にリニューアルオープンし、8Kシアターを体験することができます。



看護婦教育発祥の地 (東京慈恵会医科大学)

所 西新橋 3-25-8

日本の看護教育は東京慈恵会医科大学を創設した高木兼寛たかぎかねひろが、留学中に視察したナイチンゲール看護養成所に感銘を受け、これを模範とした看護婦教育所を有志共立東京病院（現在の東京慈恵会医科大学附属病院の前身）に置いたことにはじまります。明治17年（1884）10月17日にアメリカから看護婦M・E・リード女史を招聘して看護婦取締りに任じ、金曜日と土曜日に看護教育をはじめました。同19年（1886）には前年の秋に初めて生徒見習いとして採用した13名のうち5名を一回生として採用しました。授業は解剖・生理・看護法の講義、解剖・包帯ほつぷ・巴布（＝湿布）製法の実習があり、教育課程は2年間でした。医療の最前線で活躍する看護師の育成が現在も行われています。記念碑は高木2号館の入口脇に建っています。

区指



日本近代初等教育発祥 の地跡

所 芝公園 1-1

日本の初等教育は明治5年（1872）8月3日の学制がくせいの発布にはじまりますが、これに先立ち同3年（1870）、文部省の管轄のもと、東京府に6つの小学校が開かれました。その第一校が増上寺の子院源流院げんりゅういんに置かれ、同年6月12日に開校たいしました。大訓導くだんどう（校長）には村上天珍休むらかみちんきゅうがつき、男子は8歳から15歳まで、女子は8歳から12歳までの生徒約30人を教えました。授業科目は書算筆三科（朗読・習字・算術）で、毎日5時間、授業料は月に2分、机・硯・弁当持参で行われました。明治5年（1872）の学制の発布により「第一学区第二中学区第一番小学」として東京府の管轄となり、校地も西久保町に移りました。その後、鞆絵小学校となり、平成3年（1991）に桜小学校・桜田小学校と統合し、御成門小学校が開校しました。

区指



近代史跡

最初の芝区役所跡
(安養院)

所 芝公園2-3-2

明治11年(1878)から大正15年(1926)までこの地に芝区役所がありました。明治11年(1878)7月22日、地方三法の1つとして郡区町村編成法が公布され、東京には15の区と6つの郡が置かれることになりました。現在の港区域には赤坂区、麻布区、芝区が設けられ、11月2日に発足しました。芝区の範囲は桜田・三田・白金・高輪の地域で、戸数は14,757戸、人口は58,861人でした。区役所はここ安養院に設けられ、11月4日に開庁しました。初代区長には相原安次郎が任命されました。その後、芝区役所は愛宕町に移り、大正15年(1926)に現在の港区役所の場所に移りました。赤坂・麻布・芝の3区は昭和22年(1947)3月15日に統合され現在の港区へ引き継がれました。



慶應義塾・攻玉社跡

所 浜松町1-13-1

安政5年(1858)、築地鉄砲洲(現中央区明石町)の中津藩邸に蘭学塾を開いた福澤諭吉は慶応4年(1868)にここ芝新銭座に移りました。この時、年号をとって塾名を「慶應義塾」と名付けました。その後、明治4年(1871)に三田の島原藩邸跡(現在地)に移転しました。福澤はこの跡地を攻玉社を経営していた近藤真琴に請われて300円で譲ったといわれています。攻玉社は文久3年(1863)に近藤が鳥羽藩邸に開いた蘭学塾を起源とします。主に海軍将校を養成する異色の学校で、出身者で海軍大将になった者は鈴木貫太郎(後に第42代内閣総理大臣)など15名、また旅順攻撃の広瀬武夫中佐も同校の出身です。大正14年(1925)に西五反田へ移転しました。現在エコプラザ前に記念碑が建っていますが、実際の塾跡は道を挟んだ東側の一帯(浜松町1-6)です。 [郵]



旧新橋停車場跡

所 東新橋 1 - 5

コース 9

日本で初めての営業鉄道は明治5年(1872)に開通した新橋-横浜間28.8km(所要時間53分)です。明治2年(1869)に東京-横浜間の敷設が決定され、翌3年(1870)にイギリスから鉄道技師エドモンド・モレルらを招き、その指導のもとで建設がはじまりました。試運転を経て、明治5年(1872)9月12日に全線開通し、祝賀会が新橋鉄道館で明治天皇臨席のもとで行われました。当初の運賃は、大人上等が1円12銭5厘、中等が75銭、下等が37銭5厘とかなり高額でした(当時は米1升がおよそ4銭でした)。開業翌年の営業状況は乗客が1日平均4,347人とかなりの黒字となり、これにより鉄道が普及していくことになります。その後、大正3年(1914)新橋駅は貨物専用の汐留駅となり、昭和61年(1986)11月1日、国鉄民営化を前提としたダイヤ改正により廃止されました。



平成3年(1991)からここで発掘調査が行われ、創業当時の駅舎跡やホームなどが発見され、平成8年(1996)に国史跡に指定されました。発掘調査の後、現状を保存するため埋め戻され、現在はその上に開業当時の駅舎外観が復元されています。旧新橋停車場鉄道歴史展示室もあります。[国指]

旧新橋停車場 鉄道歴史展示室
開館時間：10:00~17:00(入館は16:45まで)
休館日：毎週月曜日(祝日の場合は翌日)
年末年始(12/29-1/3)
展示替え期間中、設備点検時
料 金：無料
問い合わせ：03-3572-1872



五雲亭貞秀 新橋鉄道館 汐留駅ヨリ入口之図



近代史跡

新聞創刊の地跡

所 虎ノ門1-2

明治7年(1874)11月2日、^{こやすたかし}子安峻・^{もとのもりみち}本野盛亨・^{しばたまさきち}柴田昌吉が日本で初めての本格的大衆啓発紙『^{よみうし}讀賣新聞』を創刊しました。発行元の日就社が置かれたのが虎ノ門の外、^{ことひらちよう}琴平町1番地の旧武家長屋です。江戸時代の情報紙であった「^{かわらばん}瓦版読み売り」から名前をとって題号とし、漢字にふりがなを振った平易な小新聞として出発しました。創刊のころ漢字教育を受けていなかった市民から、町名番地にちなんで「千里を走る虎の門、^{こと}とに^{ひら}がなは^い番なり(琴平一番)」と歓迎されました。大正6年(1917)12月1日に社号を讀賣新聞社に改め、今に続いています。明治初期から今日まで題号を変えず(ただし一時期『^{よみうし}讀賣報知』を使用)、東京で創刊したものが全国紙にまで発展した新聞は他にありません。現在、創刊の記念碑が虎ノ門交差点三井ビル脇に建っています。



最初の赤坂区役所跡 (高橋是清翁記念公園)

所 赤坂7-3-39

明治11年(1878)7月22日の^{ぐんくちようそん}郡区町村編成法により、現在の港区域には赤坂区、麻布区、芝区が設けられました。赤坂区の範囲は主に現在の赤坂・青山にあたります。最初の区役所は赤坂表町3-5(現赤坂7-2草月会館)に置かれ、11月4日に開庁しました。初代区長には^{しまづただあきら}島津忠亮が任命されました。その後、区役所は赤坂表町1丁目などに移り、明治24年(1891)に現在の港区役所赤坂地区総合支所の場所に移りました。赤坂区は昭和22年(1947)3月15日に麻布区・芝区と統合され現在の港区が誕生しました。





文人が愛したまちを たどる旅

文人が愛したまちをたどる旅

港区には小説家や歌人ゆかりの地が数多く残されています。

小説家では「紅露時代」を築いた明治期の文豪尾崎紅葉生誕の地（→59ページ）、長編小説『夜明け前』の執筆した島崎藤村の旧宅跡（→59ページ）、白樺派を代表する小説家志賀直哉の居住の跡（→57ページ）、江戸文芸をこよなく愛した永井荷風の旧居「偏奇館」跡（→58ページ）、児童文学の創始者巖谷小波宅跡（→61ページ）、エッセイ『どくとるマンボウ青春記』などで著名な北杜夫生誕の地（→57ページ）など、多彩な文人たちが生まれ、育ち、そして執筆活動に打ち込みました。この中には『芝肴』『男心は増上寺』など出身地である芝を終生大事にした尾崎紅葉や、『飯倉附近』で大正時代から昭和初期にかけての飯倉町の様子を綴った島崎藤村など、港区を舞台にした作品を発表した文人も少なくありません。

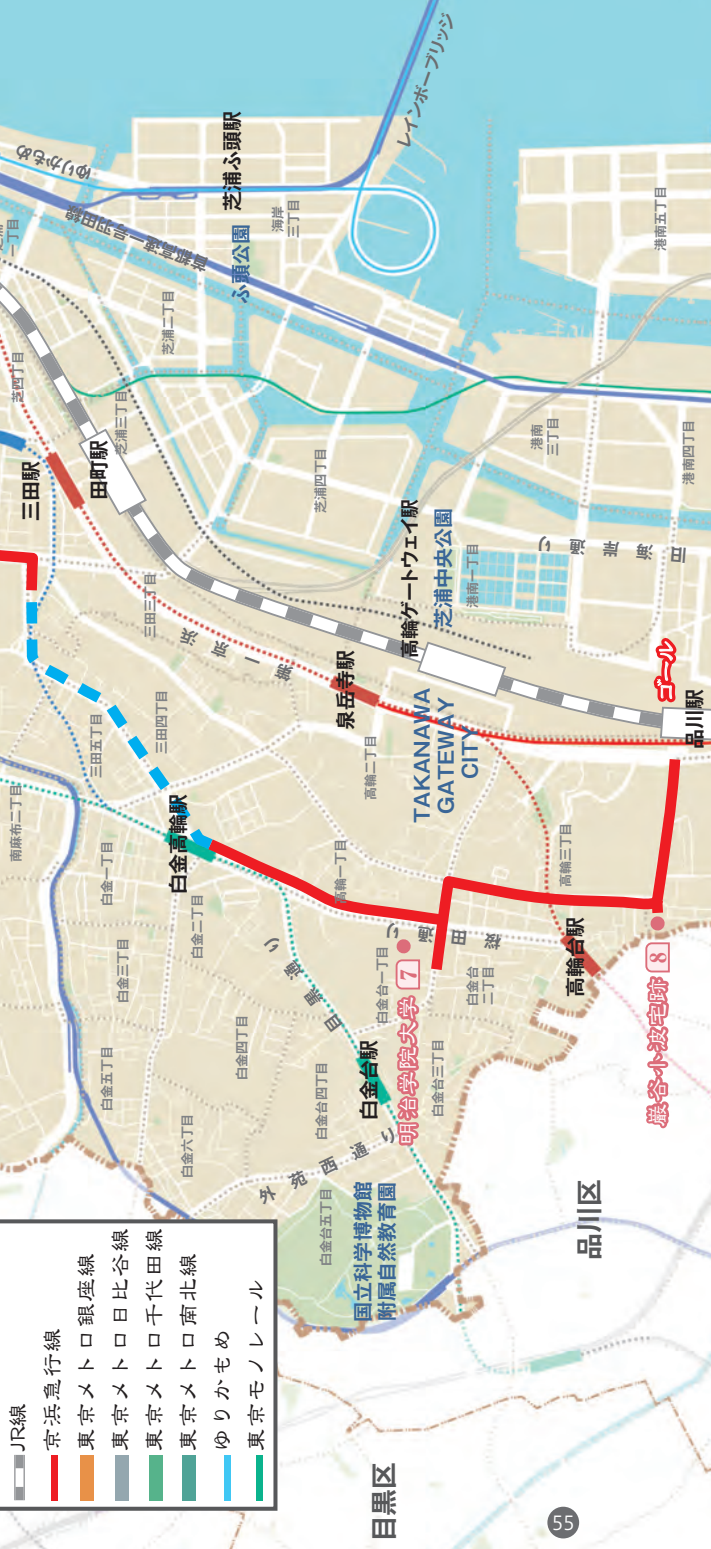
歌人ではアララギ派の代表的な歌人齋藤茂吉居住の跡（→56ページ）や、芸術家岡本太郎の母親としても有名な歌人岡本かの子生誕の地（→56ページ）、俳人

久保田万太郎終焉の地（→58ページ）などのゆかりの地があります。

これらの文人を育て、また彼らの活動の拠点ともなった教育機関として、慶應義塾大学（→60ページ）と明治学院大学（→61ページ）があります。慶應義塾大学は福澤諭吉が創立した日本の代表的な私立大学ですが、耽美派やシュルレアリスムの作家・詩人を多数輩出した三田文学の総本山でもあります。また、明治学院大学は日本で最も古い歴史をもつキリスト教主義学校（ミッションスクール）で、小説家島崎藤村の学舎でもあります。藤村の作品には同校の気風が大きく影響を与えたといわれています。

さらに短期間ではありますが、港区内に住んだ文人として、徳富蘇峰、水上瀧太郎、樋口一葉、北村透谷、国木田独步、二葉亭四迷、大佛次郎、北原白秋、菊池寛、岡本綺堂、高見順、吉川英治、太宰治、江戸川乱歩などがいます。

このように多くの文人たちに愛された街並を彼らの作品とあわせてゆっくり巡ってはいかがでしょう。



- JR線
- 京浜急行線
- 京メトロ銀座線
- 京メトロ日比谷線
- 京メトロ千代田線
- 京メトロ南北線
- ゆりかもめ
- 京モノレール

コースルート・所要時間

スタート

- 1 北 藤 茂 吉 住 居 の 跡
徒歩 15分
- 2 志 賀 直 哉 居 住 の 跡
徒歩 15分
- 3 永 井 荷 風 旧 居 福 喜 館 跡
徒歩 10分
- 4 島 崎 藤 村 旧 宅 跡
徒歩 10分
- 5 尾 崎 紅 葉 生 誕 の 地 跡
徒歩 5分
- 6 慶 應 義 塾 大 学
徒歩 25分
- 7 明 治 学 院 大 学
徒歩 10分
- 8 巖 谷 小 波 宅 跡
徒歩 15分
- ゴール

交通機関利用

徒歩

30分

17分

ちいばす (青山ルード)

青南小学校バス停

大木ビルバス停

徒歩 15分

徒歩 10分

徒歩 10分

徒歩 5分

麻布十番駅

船着地下鉄大江戸線

大門駅

徒歩 5分

都営バス[田87]又は 都営バス[東98] 東急バス 10分

徒歩 10分

白鷺輪船前バス停

徒歩 10分

徒歩 10分

岡本かの子生誕の地跡

所 南青山2-25

ここは歌人・小説家岡本かの子（1889～1939）が誕生したところです。明治22年（1889）3月1日に豪商大貫家の娘として青山南町3丁目22番地の別邸で生まれました。かの子は体が弱かったため、明治25年（1892）に両親の手許を離れ、二子（現川崎市高津区）にある大貫家の本邸で養育母に育てられました。16歳ごろから歌を雑誌に投稿しはじめ、与謝野晶子を訪ねて新詩社の同人となり、『明星』や『スバル』で新体詩や和歌を発表するようになります。明治43年（1910）に漫画家の岡本一平と結婚し、翌年後に芸術家となる太郎を出産し、青山北町六丁目（現北青山三丁目）に転居します。以降、白金、青山南町などに住まいを移し、昭和14年（1939）2月18日に青山高樹町三番地（現南青山六丁目6番）で49歳の生涯を閉じました。

さいとうせきち

齋藤茂吉居住の跡

所 南青山4-17-40

コース①

アララギ派の歌人として著名な齋藤茂吉（1882～1953）が約40年間住みました。山形県南村山郡金瓶村かなかめに生まれた茂吉（旧姓守谷）は、15歳の時に浅草で医院を開業する同郷の医師齋藤紀一さいとうきいちの養子候補として上京し、25歳の時にこの地に移り住みます。東京帝国大学医科大学を卒業し、大正3年（1914）に紀一の長女輝子と結婚し齋藤家の婿養子となります。その後、長崎医学専門学校教授、ドイツ・オーストリア留学、青山脳病院長などを勤めながら歌人としての足跡を残しました。茂吉はこの地に移り住む前年いとうさちおに伊藤左千夫の門下となり、雑誌『アララギ』に短歌を寄せ、与謝野鉄幹のてつかん、北原白秋きたはらはくしゅう、石川啄木いしかわたくぼく、上田敏うえだびん、佐佐木信綱ささきのぶつな、島木赤彦しまきあかひこらと交流を深めました。昭和20年（1945）4月に郷里に疎開し、この地を去りました。現在居住の跡に茂吉自筆の歌を刻んだ碑が建っています。



きたもりお

北杜夫生誕の地跡

所 南青山4-17-40

コース①

小説家北杜夫（本名齋藤宗吉、1927～2011）は昭和2年（1927）5月1日、父齋藤茂吉、母輝子の次男としてこの世に生を受けました。父茂吉は精神科医でもありアララギ派の著名な歌人でもありました。地元の青南小学校を卒業し、麻布中学校などを経て、旧制松本高等学校理科乙類（信州大学文理学部の前身）で青春を過ごしました。ここでの体験が『どくとるマンボウ青春記』のもとになっています。東北大学医学部卒業後は精神科医として勤務しながら執筆活動を続けます。昭和35年（1960）に『夜と霧の隅で』で第43回芥川龍之介賞を受賞し、これ以降、『どくとるマンボウ』シリーズなどのエッセイや小説、児童文学など幅広い分野で活躍しました。

しがおや

志賀直哉居住の跡

所 六本木4-3-13

コース②

白樺派を代表する小説家の1人志賀直哉（1883～1971）は14歳から29歳までの16年間をここで過ごしました。直哉の家は裕福で、明治30年（1897）に家族とともに移り住んだこの屋敷も1,682坪の広大な屋敷でした。直哉は学習院初等科、中等科、高等科を経て、東京帝国大学文学部英文学科に入学します。明治41年（1908）ごろ、それまで師事した内村鑑三のもとを去り、国文学科に転じた後に大学を中退しました。同じく明治41年（1908）に処女作となる『或る朝』を発表し、2年後に雑誌『白樺』を創刊しました。この後も『網走まで』などの作品を発表し、大正元年（1912）『大津順吉』『正義派』を発表した後、父との不和が原因で東京を離れ広島県尾道市に移り、ここでの生活に終止符が打たれます。当時の屋敷は昭和20年（1945）3月10日の東京大空襲で焼失しました。



くぼたまんたろう

久保田万太郎終焉の地跡

所 赤坂2-18~23

ここは俳人・小説家・劇作家の久保田万太郎（1889～1963）が死去するまで住んだ地です。万太郎は浅草に生まれ、慶應義塾大学で三田文学に参加します。明治44年（1911）に小説「朝顔」、戯曲「遊戯」を『三田文学』に発表し、これが新聞の時評で絶賛され、一躍脚光を浴びます。また、同じころおさないかおる小山内薫に師事し、劇作家として多くの作品を発表します。万太郎は下町情緒と古典落語を愛し、伝統的な江戸言葉を駆使して滅びゆく下町の人情を描き、俳句だけでなく、小説や劇作など幅広い創作活動を行った文人です。戦後は、創作活動のかたわら、慶應義塾評議員、日本放送協会理事、文化財保護専門審議会委員、日本演劇協会会長などを務め、昭和31年（1956）には日本文芸家協会の文学代表として中華人民共和国を訪れました。昭和36年（1961）5月6日、慶応病院で死去しました。

ながいかふう

へんきかん

永井荷風旧居「偏奇館」跡

所 六本木1-6

コース③

小説家永井荷風（本名壮吉、1879～1959）が大正9年（1920）から25年ほど住んでいました。荷風は若いころより江戸時代の文芸に親しみ、落語家入門したり狂言作者（歌舞伎の脚本家）を目指した時期もありました。父の命によりアメリカやフランスに留学し、フランス文学にも深い造詣を持ちましたが、失われつつある江戸時代的情緒と美を自らの作品に込めました。荷風は父から相続した土地を売却した後、築地などに住みましたが、ここが生涯の中でもっとも長く住んだ場所です。荷風は木造洋風2階建ての住居を新築し「偏奇館」と名付けました。この名前は外装の「ペンキ」に自らの性癖「偏奇」をかけたことに由来するそうです。荷風はこの地で創作活動に打ち込み、ぼくとうきたん『漣東綺譚』など多くの名作を生みました。偏奇館は昭和20年（1945）3月10日の東京大空襲で焼失しました。

区指



しまぎきとうそん

島崎藤村旧宅跡

所 麻布台3-4-1/7

コース④

大正7年(1918)10月から昭和11年(1936)7月まで、小説家島崎藤村(本名春樹、1872~1943)が住んでいました(旧町名、麻布区飯倉片町33番地)。藤村はこの地で円熟した創作活動を続け、最後の長編小説『夜明け前』を完成させました。また、藤村の作品『飯倉附近』は、「フランスの旅から帰った当時、しばらく高輪二本榎に暮らした」という書き出しで始まり、大正時代から昭和初期にかけての飯倉町界隈の様子がいきいきと描かれています。藤村は明治学院(→61ページ)で英語を学び、そこでの自由で華やかな気風が彼の作品に大きな影響を与えたといわれています。また、明治学院大学の校歌は藤村の作詞によるものです。



おざきこうよう

尾崎紅葉生誕の地跡

所 芝大門2-7

コース⑤

小説『金色夜叉』などの作者として知られる尾崎紅葉(本名徳太郎、1867~1903)は、慶応3年(1867)12月16日、芝中門前2丁目25番地の首尾稲荷神社そばの家で、牙彫り師尾崎谷斎の長男としてこの世に生を受けました。明治18年(1885)17歳の時に日本初の文芸団体「硯友社」を結成し、機関紙『我楽多文庫』を発行して注目を浴びます。19歳の夏に増上寺境内の紅葉山から「紅葉」と号しました。その後、幸田露伴とともに明治期の文壇の重鎮となり、「紅露時代」を築きます。門下生には泉鏡花、田山花袋、小栗風葉、柳川春葉、徳田秋声など優れた人材を輩出しました。紅葉は小説集『芝肴』、短編集『男心は増上寺』など芝界隈を題材にした作品や、芝神明前榮太樓の銘菓「江の嶋」最中の銘を選ぶなど、終生、出身地の気風を大事にした人でした。

区指



慶應義塾大学

所 三田 2-15-45

コース⑥

慶應義塾大学は日本を代表する私立大学の1つです。その起源は安政5年(1858)、中津藩の藩士福澤諭吉が藩命により築地鉄砲洲(現中央区明石町)の中屋敷内に蘭学塾を開いたことにはじまります。その後、慶応4年(1868)に芝新銭座に移転し、年号をとって塾名を「慶應義塾」と決めました(→50ページ)。そして明治4年(1871)に現在地の島原藩中屋敷跡地を貸与され、ここに移りました(翌年に払い下げを受けます)。福澤は「独立自尊」「気品の泉源」「知徳の模範」「社中協力」「自我作古(我より古を作す)」「半学半教」などの精神をもって社会の先導者にふさわしい人格形成を志しました。



また、慶應義塾大学は耽美派やシュルレアリスムの作家・詩人を多数輩出した三田文学の総本山としても知られます。明治43年(1910)5月、教員の上田敏を顧問に、永井荷風を編集主幹にすえて雑誌『三田文学』を創刊しました。創刊当初から森鷗外や芥川龍之介らに発表の場を提供する一方で、慶応出身者の久保田万太郎、水上瀧太郎、佐藤春夫、石坂洋次郎らを育てました。また、昭和初期にプロレタリア文学が盛んになると、西脇順三郎がシュルレアリスム運動を主導し、耽美派の牙城として広く知られました。

構内には慶應義塾図書館(写真左)、慶應義塾三田演説館(写真右)(いずれも国重要文化財)など貴重な文化財が残されています。



明治学院大学

所 白金台1-2-37

コース⑦

明治学院大学は日本最古のキリスト教主義学校（ミッションスクール）です。文久3年（1863）に宣教師ヘボンが横浜に開いたヘボン塾を起源とします。明治13年（1880）に築地へ移転し「築地大学校」と改称、同16年（1883）には横浜の先志学校を併合して「一致英和学校」とし、同19年（1886）に一致英和学校・英和予備校・東京一致神学校を合併して「明治学院」を設立し、翌年正式に認可されました。この時にキャンパスを白金台に定めました。昭和24年（1949）、新制大学設置の認可を受けて現在の明治学院大学が発足しました。

構内には明治学院インブリー館（国重要文化財）、明治学院記念館、明治学院礼拝堂（以上、区指定文化財）などの貴重な建造物があります。また、明治学院歴史資料館もあります。

明治学院歴史資料館

時間：9:00～16:00

休館日：土、日、祝日、その他

料金：無料

問い合わせ：03-5421-5170



いわやさぎなみ 巖谷小波宅跡

所 高輪4-1-18

コース⑧

巖谷小波（本名季雄、1870～1933）は明治政府の高官（のちに貴族院議員）で書家の巖谷一六いちろくの子として明治3年（1870）に麴町平河町で生まれました。周囲の反対を押し切り、文学を志して明治22年（1889）に尾崎紅葉おさきこうようらの硯友社けんゆうしゃに参加します。同24年（1891）に『こがね丸』を発表して創作童話の創始者となりました。翌25年（1892）に雑誌『少年界』、同28年（1895）に『少年世界』を創刊し、その後も『幼年世界』『少女世界』『幼年画報』などを主宰し、童話の創作活動や世界各国の童話の紹介を意欲的に行い、児童文学の普及に力を尽くしました。有名な『桃太郎』や『花咲爺』などの説話を再生し、世に送り出したのも小波の業績です。まさに児童文学の開拓者といえるでしょう。この地は明治40年（1907）に購入し、後に改築しました。昭和8年（1933）63歳で死去しました。〔圖〕



索引

芝エリア

1 赤穂義士9名切腹の地跡（水野監物邸跡）	22
2 浅野内匠頭切腹の地跡	20
3 大石主税ら切腹の地跡	22
4 尾崎紅葉生誕の地跡	59
5 オランダなど使節宿館跡（真福寺）	34
6 勝海舟・西郷隆盛会見の地跡	30
7 烏森神社	4
8 看護婦教育発祥の地（東京慈恵会医科大学）	49
9 旧芝離宮恩賜庭園	12
10 旧新橋停車場跡	51
11 慶應義塾・攻玉社跡	50
12 慶應義塾大学	60
13 最初の芝区役所跡（安養院）	50
14 薩摩藩邸焼き討ち事件跡	30
15 芝公園紅葉瀑布・溪流	12
16 芝丸山古墳	4
17 新聞創刊の地跡	52
18 仙石伯耆守邸跡	20
19 増上寺	5
20 東京放送局跡（NHK 放送博物館）	48
21 日英修好通商条約締結の地・オランダ公使宿跡（西應寺）	40
22 日本近代初等教育発祥の地跡	49
23 ヒュースケン暗殺事件跡	29

麻布エリア

1 赤羽接遇所跡（飯倉公園）	34
2 赤穂義士10名切腹の地跡（毛利庭園）	21
3 麻布氷川神社	8
4 旧有栖川宮邸（有栖川宮記念公園）	14
5 旧岩崎邸庭園（国際文化会館）	13
6 最初の麻布区役所跡（龍澤寺）	47
7 最初のアメリカ公使館跡（善福寺）	35
8 志賀直哉居住の跡	57
9 島崎藤村旧宅跡	59
10 善福寺	8
11 永井荷風旧居「偏奇館」跡	58

12	日本経緯度原点	48
13	ヒュースケン墓・伝吉墓（光林寺）	36
14	プロイセン公使館跡	35

赤坂エリア

1	岡本かの子生誕の地跡	56
2	勝安房邸跡	28
3	勝海舟邸跡	29
4	北杜夫生誕の地跡	57
5	旧毛利家庭園「清水園」跡（檜町公園）	13
6	久保田万太郎終焉の地跡	58
7	最初の赤坂区役所跡（高橋是清翁記念公園）	52
8	齋藤茂吉居住の跡	56
9	三次藩浅野家屋敷跡（氷川神社）	21

高輪エリア

1	浅野長矩・赤穂義士の墓	24
2	巖谷小波宅跡	61
3	大石内蔵助ら切腹の地跡	23
4	オランダ公館跡	38
5	亀塚	7
6	北里研究所病院	47
7	旧朝香宮邸（東京都庭園美術館）	14
8	郷土歴史館	6
9	最初のイギリス公使館跡（東禅寺）	37
10	最初のフランス公使館跡（済海寺）	39
11	最初のプロイセン使節宿所跡（広岳院）	36
12	歯科医学教育発祥の地跡	46
13	スイス使節宿所跡	39
14	泉岳寺	23
15	高輪接遇所跡（泉岳寺前児童遊園）	38
16	東京大学医科学研究所	46
17	三田台公園	7
18	明治学院大学	61

芝浦港南エリア

1	ガス創業の地	44
2	旧協働会館（伝統文化交流館）	45
3	品川台場（第三・第六）	28
4	南極探検隊記念碑	44
5	放送記念碑	45



港区観光
マップ

港区 観光 マップ



S=1:33,000

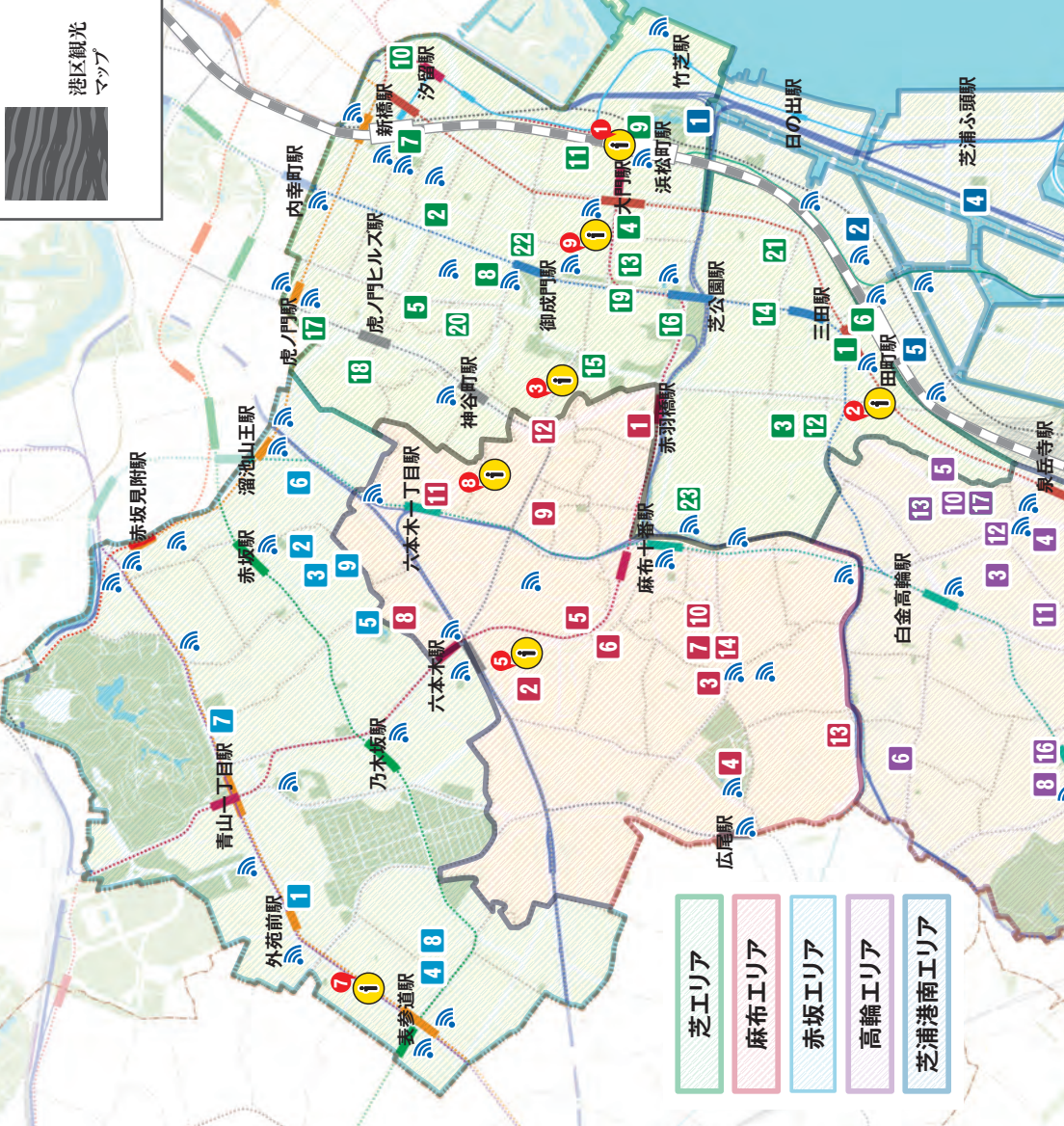


路線図

- 都営浅草線
- 都営三田線
- 都営大江戸線
- JR線
- 京浜急行線
- 東京メトロ銀座線
- 東京メトロ日比谷線
- 東京メトロ千代田線
- 東京メトロ南北線
- ゆりかもめ
- 東京モノレール

- 0 観光スポット
- Minato City Wi-Fi
- 1 港区観光インフォメーションセンター

- 芝エリア
- 麻布エリア
- 赤坂エリア
- 高輪エリア
- 芝浦港南エリア





※この地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の1万分の1地形図を使用した。(承認番号平26情使、第832号)

観光スポット

- 芝エリア**
- 7 東京放送局跡 (NHK放送博物館)
 - 1 赤穂藩士9名切腹の地跡 (水野監物邸跡)
 - 2 浅野内匠頭切腹の地跡
 - 3 大石主税ら切腹の地跡
 - 4 尾崎紅葉生誕の地跡
 - 5 オランダなど使節宿館跡 (真福寺)
 - 6 勝海舟・西郷隆盛会見の地跡
 - 7 烏森神社
 - 8 看護婦教育発祥の地 (東京慈恵会医科大学)
 - 9 旧芝蕪堂恩賜庭園
 - 10 旧新橋停車場跡
 - 11 慶應義塾・攻玉社跡
 - 12 慶應義塾大学
 - 13 最初の芝区役所跡 (安養院)
 - 14 薩摩藩邸焼き討ち事件跡
 - 15 芝公園職工葉澤布・深流
 - 16 芝丸山古墳
 - 17 新聞創刊の地跡
 - 18 仙石佐書守邸跡
 - 19 増上寺
- 高輪エリア**
- 13 ヒューストン墓・伝吉墓 (光林寺)
 - 14 プロイセン公使館跡
 - 15 赤坂エリア
 - 1 回本かの子生誕の地跡
 - 2 勝安房邸跡
 - 3 勝海舟邸跡
 - 4 北村天生誕の地跡
 - 5 旧毛利家庭園「清水園」跡 (樟町公園)
 - 6 久保田万太郎終焉の地跡
 - 7 最初の赤坂区役所跡
 - 8 齋藤茂吉居住の跡
 - 9 三次浅渡野家屋敷跡 (水川神社)
 - 高輪エリア
 - 1 浅野長矩・赤穂藩士の墓
 - 2 蔵合小波亭跡
 - 3 大石内蔵助ら切腹の地跡
 - 4 オランダ公使館跡
 - 5 亀塚
 - 6 北里研究所病院
- 麻布エリア**
- 1 赤羽接遇所跡 (飯倉公園)
 - 2 赤穂藩士10名切腹の地跡 (毛利庭園)
 - 3 麻布水川神社
 - 4 旧有栖川邸
 - 5 有栖川宮記念公園
 - 6 旧岩崎邸庭園(国際文化会館)
 - 7 最初の麻布区役所跡(龍澤寺)
 - 8 最初のアメリカ公使館跡 (善福寺)
 - 9 志賀直哉居住の跡
 - 10 鳥崎藤村旧宅跡
 - 11 善福寺
 - 12 永井尚風(旧居「扁奇館」跡)
 - 13 日本経緯度原点
- 港区観光インフォメーションセンター**
- 1 東京ハンラマライン(東京モレール)浜松町駅(一時閉鎖中)
 - 2 港区浜松町2-4-12
 - 3 札の辻スクエア
 - 4 港区芝5-36-4
 - 5 東京タワー
 - 6 アクアシティお台場インフォメーションカウンター
 - 7 港区台場1-7-1
 - 8 六本木ヒルズ森タワー総合インフォメーション
 - 9 港区六本木6-10-1
 - 10 Keikyu Tourist Information Center (Shinagawa)
 - 11 港区高輪3-26-26
 - 12 きらび銀行本店東京観光案内窓口
 - 13 港区南青山3-10-43
 - 14 麻布ヒルズタワープラザインフォメーションカウンター
 - 15 港区麻布台1-3-1
 - 16 ナイセンクワッド TOKYO BIG GATE
 - 17 港区芝大門1-16-7
 - 18 TAKANAWA GATEWAY Travel Service Center
 - 19 港区高輪2-21-2

Minato City Wi-Fi

港区では、区内各所に無料で利用できる公衆無線LANのサービスを提供しています。1回の接続時間は60分、1日の接続回数の制限はありません。



※接続方法、最新のWi-Fiスポットエリアはこちらから

港区観光インフォメーションセンター

- 1 旧朝香宮邸 (東京都庭園美術館)
- 2 郷土歴史館
- 3 最初のイギリス公使館跡 (東禅寺)
- 4 最初のフランス公使館跡 (濟海寺)
- 5 最初のプロイセン使節宿所跡 (広岳院)
- 6 植科医学教育発祥の地跡
- 7 スイス使節宿所跡
- 8 泉岳寺
- 9 高輪接遇所跡 (泉岳寺前兒童遊園)
- 10 東京大学医学研究所
- 11 三田台公園
- 12 明治学院大学
- 13 芝浦港南エリア
- 14 ガス創業の地
- 15 旧協働会館 (伝統文化交流館)
- 16 品川台場 (第三・第六)
- 17 南極探検隊記念碑
- 18 放送記念碑



戸板女子短期大学服飾芸術科の学生の皆さんに授業の一環として歴史観光PRキャラクターとPRロゴ・キャッチコピーの作成にご協力いただきました。

徳川家康イメージキャラクター「みなやすくん」



■キャラクター説明

忍耐力のある性格であったという徳川家康のイメージから、余裕があり堂々とした雰囲気こだわって作成したキャラクターです。

服には港区旗のカラーを使用し、区の花であるアジサイを柄として使用しています。

勝海舟イメージキャラクター「かつとくん」



■キャラクター説明

豪快で怖いもの知らずな性格であったという勝海舟のイメージから、表情にこだわって作成したキャラクターです。

服には東京タワーの「インターナショナルオレンジ×白」を取り入れ、波の柄を使用することで港区の海をイメージしています。

発行 港区産業・地域振興支援部 観光政策担当

港区芝五丁目36番4号

TEL：03-6435-4661

FAX：03-6435-4693

発行年月 2026年(令和8年)2月発行

発行番号 2025163-3245